出雲ジュンテンドー敷地造成事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

高　岡　遺　跡

2000年3月

出　雲　市　教　育　委　員　会

高岡遺跡報告書正誤表

頁	行	図	誤	正
25・26	-	-	右上隅「高岡遺跡1区」	高岡遺跡3区
45	15	-	調査区東壁端面	調査区東壁断面

出雲ジュンテンドー敷地造成事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

高　岡　遺　跡

2000年3月

出　雲　市　教　育　委　員　会

序

このたび、出雲ジュンテンドー敷地造成事業に伴う高岡遺跡発掘調査を実施しましたところ、出雲平野では発見例の少ない、平安時代と中・近世の水田跡と考えられる遺構が検出されました。

これにより、弥生時代から今日に至るまで連綿と受け継がれてきた、水稲耕作の一端をうかがい知る上で不可欠な資料を追加できたことは、貴重な成果と言えます。

この成果を、出雲平野の農耕社会に関する理解や歴史学習などの一助にしていただければ幸いです。

今後とも、地元の皆様の熱意により、後世にこの遺跡を伝え、また、この成果が広く活用されることを期待するとともに、発掘調査及び本書を発刊するにあたり、ご協力を賜りました株式会社ジュンテンドーをはじめ関係者の皆様に心から御礼申し上げます。

平成12年(2000)3月

出雲市教育委員会
教育長　多　久　　博

例　　言

1．　本書は株式会社ジュンテンドーの依頼を受けて、出雲市教育委員会が平成10年度から平成11年度にかけて実施した出雲ジュンテンドー敷地造成事業に伴う高岡遺跡発掘調査の報告書である。

2．　発掘調査地は次のとおりである。

高岡遺跡（出雲市遺跡地図Ｃ 05）　島根県出雲市高岡町1270，1271，1272，1281，1282，1283-1，1283-2，1284

3．　発掘調査は、平成11年１月６日に着手し、平成11年４月20日に終了した。

4．　調査組織は次のとおりである。

調査主体　　出雲市教育委員会
事務局　　出雲市教育委員会　文化振興課
調査指導　　守岡正司（島根県教育委員会　文化財課　主事）
調査担当者　三原一将（文化振興課　副主任主事）
調査補助員　羽木伸幸、伊藤めぐみ、佐々木紀明（文化振興課　臨時職員）

5．　本書の執筆・編集は三原が行ったが、第５章と第６章では渡辺正巳（文化財調査コンサルタント）、大塚泰介（島根大学汽水域研究センター）の両氏から玉稿を賜った。

6．　本書で使用した方位は真北を示す。

7．　遺物の出土量を示すために用いたコンテナは，Ｌ540mm×Ｗ340mm×Ｈ150mm、ビニール袋はＬ380mm×Ｗ260mmのものである。

8．　報告書作成にあたっては、以下の方々から有益なご助言をいただいた。記して謝意を表しておきたい。（敬称略）

田中義昭（元島根大学教授）、西尾克己（島根県埋蔵文化財調査センター）

9．　遺物の写真撮影は三原が行ったが、鉄製品のＸ線写真については島根県埋蔵文化財調査センターに依頼した。

10．　発掘調査、遺物整理、報告書作成については、次の方々の協力を得た。

発掘調査　　伊藤悟郎、岩田和子、奥田広信、恩田洋平、片山　修、鎌田　悟、田中二三、中島三恵子、中野治夫、福田雅美、宮崎　綾、米山清司
遺物実測　　村田理恵、竹田章乃
遺物整理　　小村睦子、園山美千代
編集補助　　羽木伸幸

11．　本遺跡の出土遺物、実測図、写真は出雲市教育委員会で保管している。

目　　次

序
例　言
目　次
挿図目次
写真図版目次

第１章　位置と環境 …… 1
第２章　調査に至る経緯 …… 3
第３章　調査の概要 …… 4
第４章　遺構と遺物
　１．１区の遺構と遺物 …… 7
　２．２区の遺構と遺物 …… 11
　３．３区の遺構と遺物 …… 19
第５章　高岡遺跡における花粉およびプラント・オパール分析 …… 33
第６章　出雲市高岡遺跡から得られた珪藻遺骸群集に基づく古環境の推察 …… 40
第７章　まとめ …… 45
　土器観察表 …… 47
　鉄製品観察表 …… 49

写真図版
報告書抄録

挿　図　目　次

第１章　位置と環境

第１図　高岡遺跡位置図（1:100,000）……　1

第２図　高岡遺跡と周辺の遺跡（1:8,000）……　2

第３章　調査の概要

第３図　調査区配置図１（1:2,000）　……　4

第４図　調査区配置図２（1:2,500）……　5

第５図　調査区配置図３（1:500）……　6

第４章　遺構と遺物

１．１区の遺構と遺物

第６図　高岡遺跡１区遺構配置図(1:50)　9･10

第７図　１区出土土師器･須恵器実測図（1:3）‥　8

２．２区の遺構と遺物

第８図　高岡遺跡２区遺構配置図(1:80)　13～16

第９図　２区調査最終状況図（1:220）……　12

第10図　２区出土土師器実測図（1:3）……　17

第11図　２区出土須恵器実測図（1:3）……　17

第12図　２区出土陶磁器実測図（1:3）……　18

第13図　２区出土鉄製品実測図（1:2）……　18

３．３区の遺構と遺物

第14図　高岡遺跡３区遺構配置図（1:80）　21～24

第15図　３区畦畔強調図（1:100）……　25・26

第16図　３区遺構断面ライン配置図（1:180）‥　27

第17図　３区遺構断面図１（1:50）……　28

第18図　３区遺構断面図２（1:50）……　29

第19図　３区遺構断面図３（1:50）……　30

第20図　３区調査最終状況図（1:220）……　31

第21図　３区出土土師器・陶磁器実測図（1：3）・　32

第22図　３区出土鉄製品実測図（1：2）‥‥　32

第５章　高岡遺跡における花粉およびプラント・オパール分析

図１　調査区配置　……　33

図２　１区の花粉ダイアグラム　……　37

図３　２区の花粉ダイアグラム　……　38

図４　１区のプラント・オパールダイアグラム　…　39

図５　２区のプラント・オパールダイアグラム　…　39

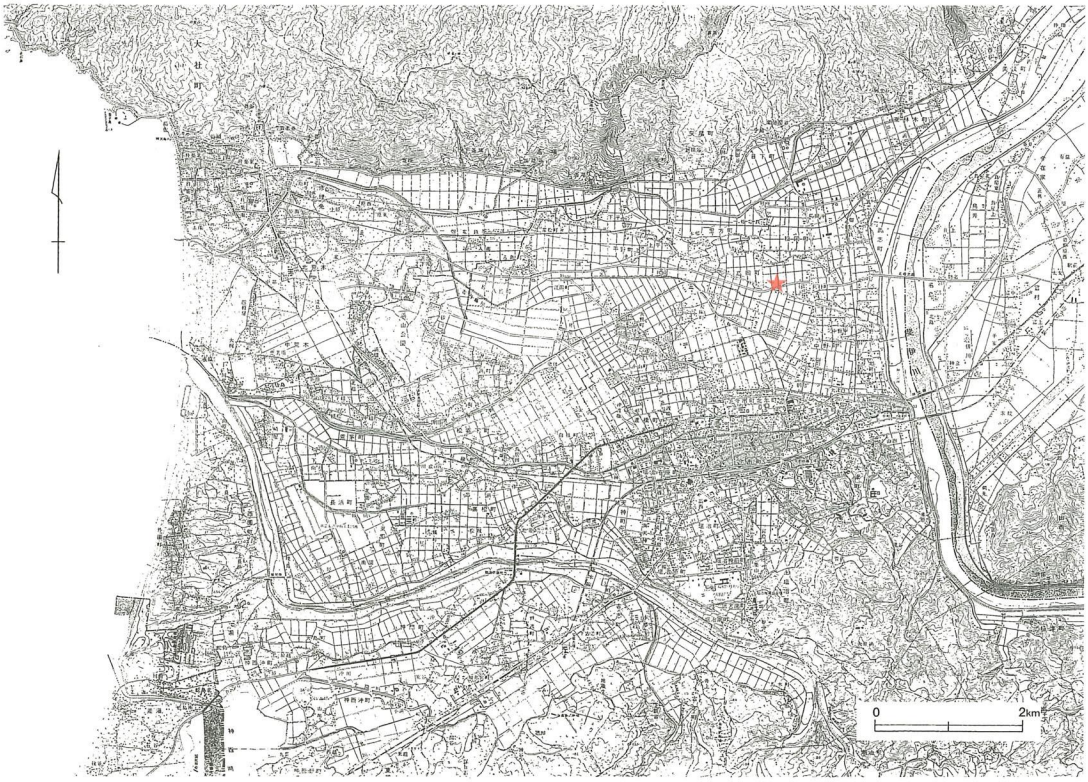
写 真 図 版 目 次

表紙　高岡遺跡調査区全景：稲岡遺跡、島根半島を望む（南から）
図版１　高岡遺跡調査区全景（上から）
図版２　高岡遺跡１区全景（上から）
図版３　高岡遺跡２区全景（上から）
図版４　高岡遺跡３区全景（上から）
図版５－１　１区調査着手状況（西から）
　　２　１区調査風景（南東から）
図版６－１　１区遺構検出状況（東から）
　　２　１区完掘状況（東から）
図版７－１　１区遺構検出状況：SW03付近（北から）
　　２　１区遺構完掘状況：SW03付近（北から）
図版８－１　１区遺構検出状況：SW10付近（北から）
　　２　１区遺構完掘状況：SW10付近（北から）
図版９－１　１区遺構完掘状況：平坦面付近（北から）
　　２　１区完掘状況（西から）
図版10－１　２区調査着手状況（南から）
　　２　２区調査風景（南西から）
図版11－１　２区畝状遺構検出状況：Ａ１・Ｂ１Gr付近（南から）
　　２　２区畝状遺構検出状況：Ａ１・Ｂ１Gr付近（南から）
図版12－１　２区畝状遺構検出状況：Ａ１・Ｂ１Gr付近（西から）
　　２　２区畝状遺構検出状況：Ａ５・Ｂ５Gr付近（西から）
図版13－１　２区土師器(**10－7**)出土状況(上から)
　　２　２区須恵器(**11－11**)出土状況（上から）
図版14　２区堆積土サンプリング状況：調査区東壁北端付近（西から）
図版15－１　２区完掘状況（南から）
　　２　２区完掘状況（北から）
図版16－１　３区調査着手状況：重機掘削後(西から)
　　２　３区調査風景（北東から）
図版17－１　３区遺構完掘状況:大畦畔１付近(北から)
　　２　３区遺構完掘状況:大畦畔２付近(北から)
図版18－１　３区畦畔断面(Ｃ１－Ｃ２)：ラミナ構造
　　２　３区畦畔断面(Ｃ４－Ｃ５)：ラミナ構造
図版19－１　３区大畦畔２断面(Ｃ６－Ｃ７)：ラミナ構造
　　２　３区畦畔断面(Ｂ９'－Ｃ９')：ラミナ構造
図版20－１　３区磁器(**21－４**)出土状況(南から)
　　２　３区陶器(**21－５**)出土状況(南から)
図版21－１　３区完掘状況（西から）
　　２　３区完掘状況（東から）
図版22－１　ラジコンヘリによる空中写真撮影風景
　　２　発掘調査参加者
図版23－１　１区出土土師器・須恵器
　　２　２区出土土師器
図版24－１　２区出土須恵器
　　２　２区出土陶磁器
図版25－１　２区出土磁器
　　２　３区出土土師器・陶磁器
図版26－１　２区・３区出土鉄製品
　　２　２区・３区出土鉄製品：Ｘ線写真

第１章　位置と環境

高岡遺跡は、出雲平野北東部の微高地に位置する。出雲平野は斐伊川・神戸川の沖積作用により形成された沖積平野であるが、高岡遺跡が占地する微高地は、斐伊川がかつて西流し日本海に注いでいた際に形成された自然堤防と考えられ、東には稲岡遺跡が隣接して存在する。

高岡遺跡の存在は、1985年に組織された「出雲平野集落遺跡研究会」などによる踏査の結果明らかになった。同会は斐川町の荒神谷遺跡から青銅器の大量発見があったのを契機に組織され、出雲平野で広範囲にわたる踏査を実施した結果、1987年までに出雲市高岡町付近で計7箇所で遺物散布地を発見している。出雲市教育委員会はこの結果をもとに、1993年に『出雲市遺跡地図』を発刊するにあたり、これらをまとめて高岡遺跡として周知している。



第１図　高岡遺跡位置図（1：100,000）

高岡遺跡の出現期については、同会が採取遺物から弥生時代後期頃から集落が営まれるようになったと推測している。出雲平野に本格的に人が進出するのは、弥生時代中期頃であるが、高岡遺跡ではこれまでの採取遺物から推測する限りでは、若干出現が遅れているようである。古墳時代には高岡遺跡の北約２kmに迫る島根半島の山麓付近に大寺古墳などが築かれるが、この頃の高岡遺跡周辺の様子は、同時代の遺構などが検出されていないため分かっていない。奈良時代の高岡遺跡周辺は、733年に編纂された『出雲国風土記』によると、「神門郡塩冶郷」の北部に位置していたことがうかがえる。中世の遺跡としては、毛利元就によって尼子氏攻略の拠点として築かれた山城と考えられる鳶ヶ巣城跡が北山山地に残り、詳細は不明であるが、廻城と呼ばれる館が高岡遺跡付近に存在していたようである。

第2図　高岡遺跡と周辺の遺跡（1：8,000）

また、高岡遺跡から約900m東の荻杼古墓からは、中国南宋の龍泉窯産である青磁の碗と皿が出土し重要文化財に指定されている。

今回の調査地は周知の高岡遺跡から南東に600m、稲岡遺跡から南に250m離れた、後背低地上の地点であったため、これらの遺跡、特に稲岡遺跡に存在していた集落の水田などに利用されていた可能性がその位置環境からも容易に想像できる。

引用・参考文献

島根県教育委員会ほか　『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』　1980

出雲考古学研究会　『古代の出雲を考える３　出雲平野の集落Ｉ』　1983

田中義昭・西尾克己　「出雲平野における原始・古代集落の分布について」『山陰地域研究』第４号 島根大学山陰地域研究総合センター　1988

出雲市教育委員会　『出雲市遺跡地図』　1993

加藤義成　『修訂出雲国風土記参究』　今井書店　1997

第２章　調査に至る経緯

平成10年（1998）３月17日付けで、島根県知事より開発協議通知書を受けた株式会社ジュンテンドーは、文化財保護についての指導事項に基づき、平成10年４月10日付けで埋蔵文化財試掘調査を出雲市教育委員会に依頼した。この依頼を受け平成10年５月18日から20日にかけて出雲市教育委員会が試掘調査を実施した結果、主に事業予定地北寄りで平安時代頃の土器片を出土する水田跡と考えられる遺構を検出した。事業予定地北寄りは店舗建設予定地であり、そのまま計画を進める場合は広範囲にわたり遺跡が消滅するため、協議の結果、店舗を遺構のない事業予定地南寄りに配置し、それでもなお遺跡の範囲に重なる箇所のみ調査を実施することとした。これにより、平成10年12月21日付けでジュンテンドー側から発掘調査の依頼を受けた出雲市教育委員会は、受託事業として平成11年（1999）１月６日から平成11年４月20日まで現地発掘調査を実施した。

なお、文化財保護法に基づく主な書類などについては、下記のとおり提出された。

平成10年12月８日「遺跡発見の届出について」㈱ジュンテンドーから出雲市教育委員会へ

平成10年12月８日「埋蔵文化財発掘の届出について」㈱ジュンテンドーから出雲市教育委員会へ

平成11年１月27日「埋蔵文化財発掘調査の報告について」出雲市教育委員会から島根県教育委員会へ

平成11年２月26日「高岡遺跡１区発掘調査概報の提出について」出雲市教育委員会から島根県教育委員会へ

平成11年３月16日「高岡遺跡２区発掘調査概報の提出について」出雲市教育委員会から島根県教育委員会へ

平成11年４月12日「埋蔵文化財発掘調査の報告について」出雲市教育委員会から島根県教育委員会へ

平成11年４月20日「高岡遺跡３区発掘調査概報の提出について」出雲市教育委員会から島根県教育委員会へ

平成11年５月６日「埋蔵文化財保管証の提出について」出雲市教育委員会から島根県教育委員会へ

第３章　調査の概要

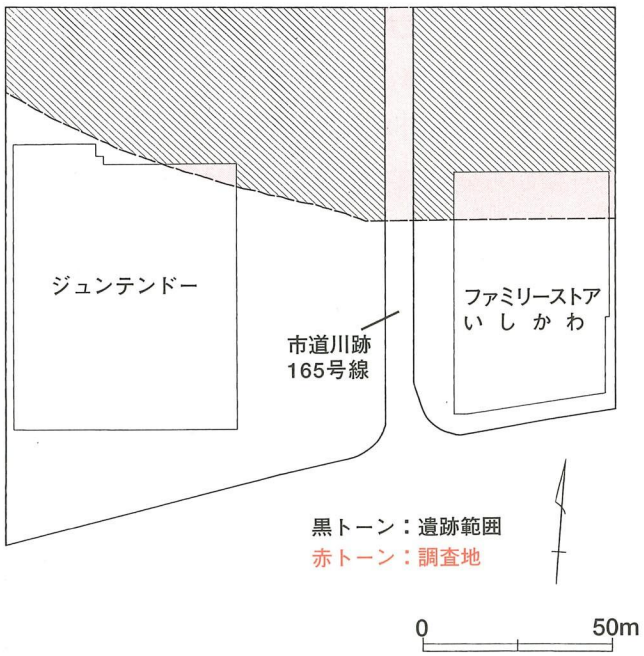
出雲ジュンテンドー敷地造成事業においては、出雲ジュンテンドー店舗、市道川跡165号線、ファミリーストアいしかわ店舗建設予定地のうち、事業予定地北寄りの遺跡に重なる部分が発掘調査の対象となった。出雲ジュンテンドー店舗新設予定地を１区（49㎡）、市道川跡165号線改良予定地を２区（357㎡）、ファミリーストアいしかわ新設予定地を３区（429㎡）とし、事業の工程と歩調を合わすため、１区から順に調査を着手・完了していくこととした。いずれの調査区も試掘調査のデータをもとに、遺跡に影響のない深さまでは重機により掘削し、それ以降は手掘りで調査を進めた。

１区は出雲ジュンテンドー店舗新設予定地の北東角を遺跡がかすめているため、平面形が直角三角形の調査区となった。基準杭の設置については、まず、西角にＡ１を設定し、東に５ｍピッチでＡ４まで設定した。次に、それぞれのＡラインの杭から南に２ｍ、３ｍ、４ｍの地点にＢ２、Ｂ３、Ｂ４を設置した。また、杭によって囲まれる部分をグリッドとし、北西角に位置する杭の名称をそのグリッドの名称とした。標高3.15m付近で水田跡と考えられる遺構を検出し、少量の遺物も出土した。

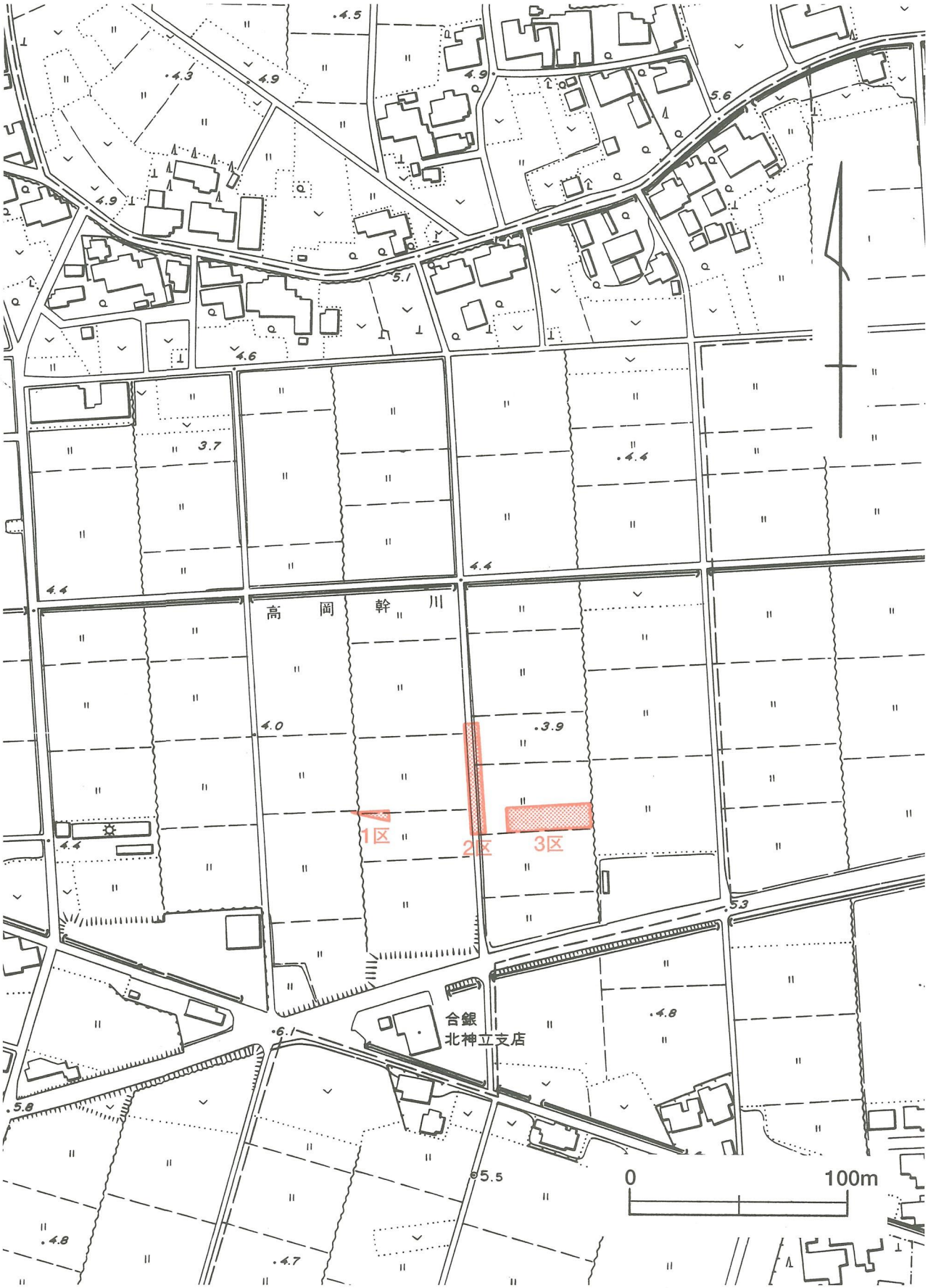
２区は事業予定地内のほぼ中央を南北に伸びる市道川跡165号線改良予定地のうち、北寄りの区間が調査の対象であり、東西７ｍ×南北51ｍの長方形の調査区である。基準杭の設定は、まず、調査区中央にＢラインを南北に想定し、南から５ｍピッチで順にＢ１～Ｂ11を設定した。次に、Ｂラインの西にＡライン、東にＣラインを2.5m間隔で平行に設定し、Ｂラインと同様にＡ１～Ａ11、Ｃ１～Ｃ11を設定した。また、南西に位置する杭をグリッド名として用いている。標高3.30m前後で畝状遺構を検出したためこの面で調査を実施し、少量の遺物も出土した。

３区はファミリーストアいしかわ店舗新築予定地のうち、北寄りの東西40ｍ×南北11ｍの長方形の部分が調査対象である。基準杭の設定は東西に５ｍ間隔で平行に北からＡ～Ｃライン、南北に５ｍ間隔で平行に西から１～９ラインを想定し、直交点にそれぞれのライン名をあわせＡ１、Ｂ２などの基準杭を設置し、グリッド名には北西角の杭の名称を用いた。標高3.35m前後で畦畔状の遺構を検出したため、この面で精査を行ったところ、水田跡と思われる区画を多数検出し、遺物も少量出土した。

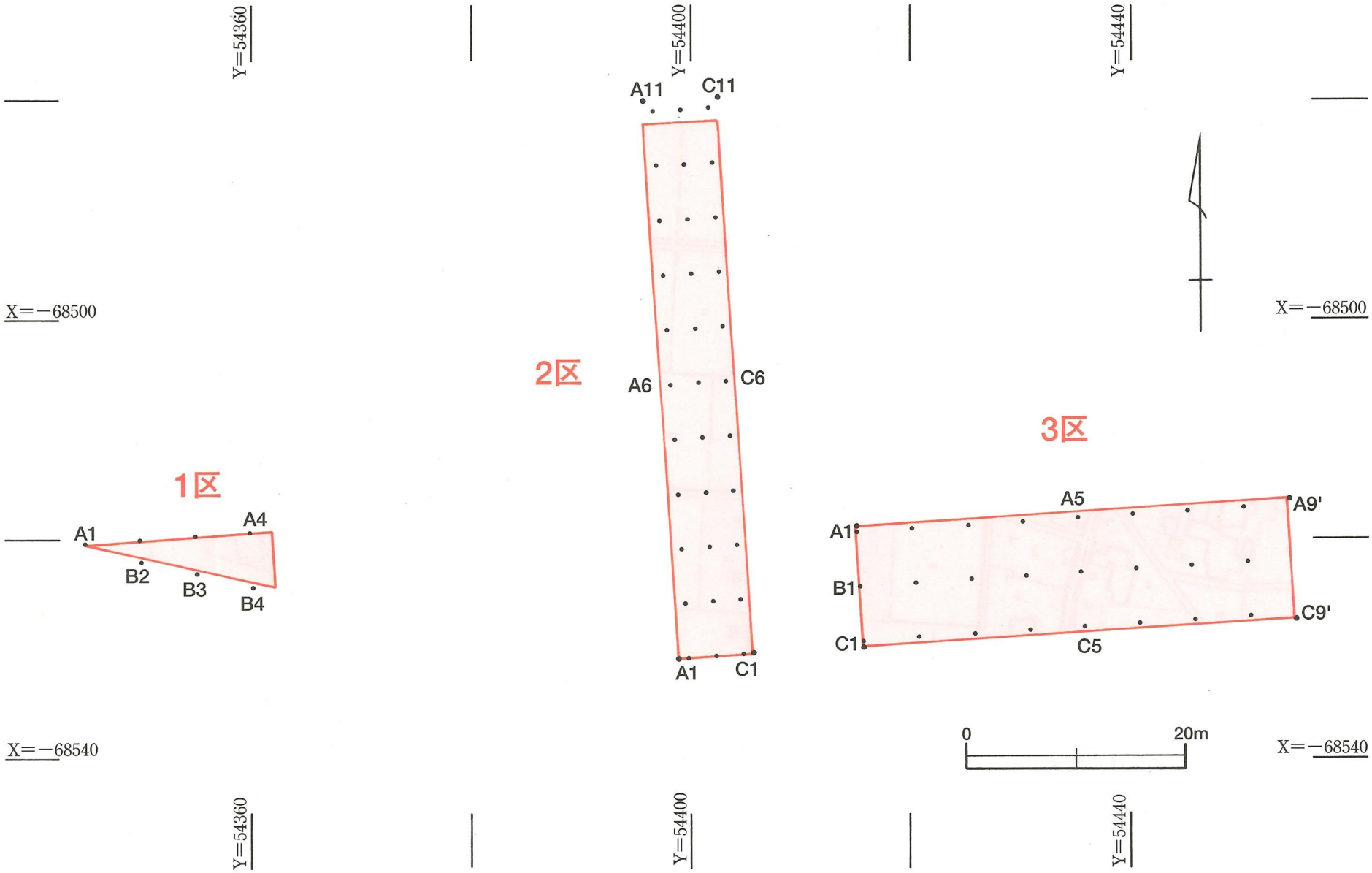
いずれの調査区も、一部グリッドの検出面以下の精査を行い、遺構がないことを確認し調査を打ち切った。



第3図　調査区配置図1（1：2,000）



第4図　調査区配置図2（1：2,500）



第5図　調査区配置図3（1：500）

第４章　遺構と遺物

１．１区の遺構と遺物

１区の土層の順序は上層から１褐色粘質土層（耕作土）、２暗青灰色粘質土層（耕作土）、３灰色粘質土層、４灰色シルト層、５黒褐色粘質土層、６黄灰色粘土層（地山）、７黄灰色粘質土層、８黄灰色粘土層である。遺構は６黄灰色粘土層（地山）上面の標高3.15m付近で検出した。出土遺物は須恵器・土師器の小片がほとんどで、遺構検出面直上、つまり、６層・７層直上で、一部はめり込んだ状態で出土しているものの、その他は包含層からの出土である。

水田遺構（第６図）

検出した遺構は水田遺構と考えられ、小区画を10区画確認した。これらを検出したグリッドはＡ１グリッド東寄りから３グリッド西寄りまでの区間であり、３グリッド東寄りから４グリッドにかけては平坦面が広がっているが、水路などは確認していない。検出した範囲では、小区画は東西に伸びる畦畔を軸にし線対称に存在する。よって、畦畔のみを観察すると、南北と東西のそれはほぼ直交し「十字」状を呈している。また、畦畔断面は不整な台形状であり、裾が広がる。検出した高さは８cm～17cmであり削平を受けている可能性もあるが、幅を勘案すると本来のものとあまり差がないと考えられる。板や杭などで畦畔を補強した痕跡は見あたらず、地を掘り下げる作業過程で畦畔を形成したと思われる。また、水を張るために畦畔を切った痕跡なども見つかっていない。

小区画の規模については、調査区の幅が狭く全体を検出できた区画がないため不明な点が多いが、検出規模や出土遺物については表１に示すとおりである。小区画の底には複数の窪みが観察され、足跡などである可能性は否定できないが、柔らかな粘土上での検出であったため、精査には至っていない。

遺構名	検出規模（cm）	出　土　遺　物
SW01	L65以上×W108以上×H16	覆土中から土師器のごく小片５点
SW02	L25以上×W100以上×H11	覆土中から**7－3**が出土
SW03	L83以上×W205×H13	無し
SW04	L83以上×W195×H11	覆土中から土師器・須恵器のごく小片計２点
SW05	L93以上×W180×H9	無し
SW06	L118以上×W193×H8	覆土中から土師器のごく小片１点
SW07	L143以上×W188×H17	覆土中から土師器・須恵器のごく小片計８点
SW08	L100以上×W165×H16	覆土中から土師器・須恵器のごく小片計７点
SW09	L200以上×W150×H13	覆土中から土師器・須恵器の小片計５点
SW10	L113以上×W180×H9	覆土中から土師器のごく小片計２点

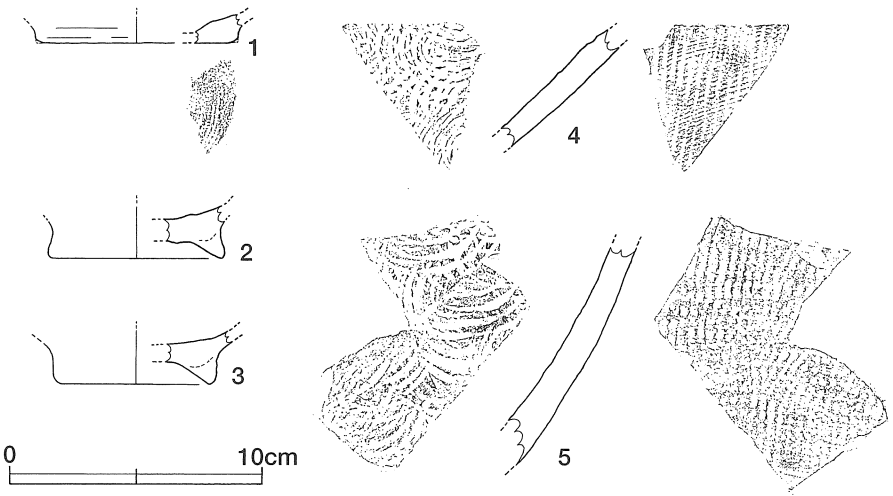
*L（長さ）×W（上幅）×H（深さ）：深さについては取り囲む畦畔と底の平均標高の差を記載した。

３グリッド東寄りから４グリッドにかけての平坦面上は、精査の結果遺構は検出していない。調査地付近は平地であるため本来棚田であったものが削平された結果生じた平坦面である可能性はない。おそらく、田にアプローチするための空間と考えられる。

出土遺物（第７図）

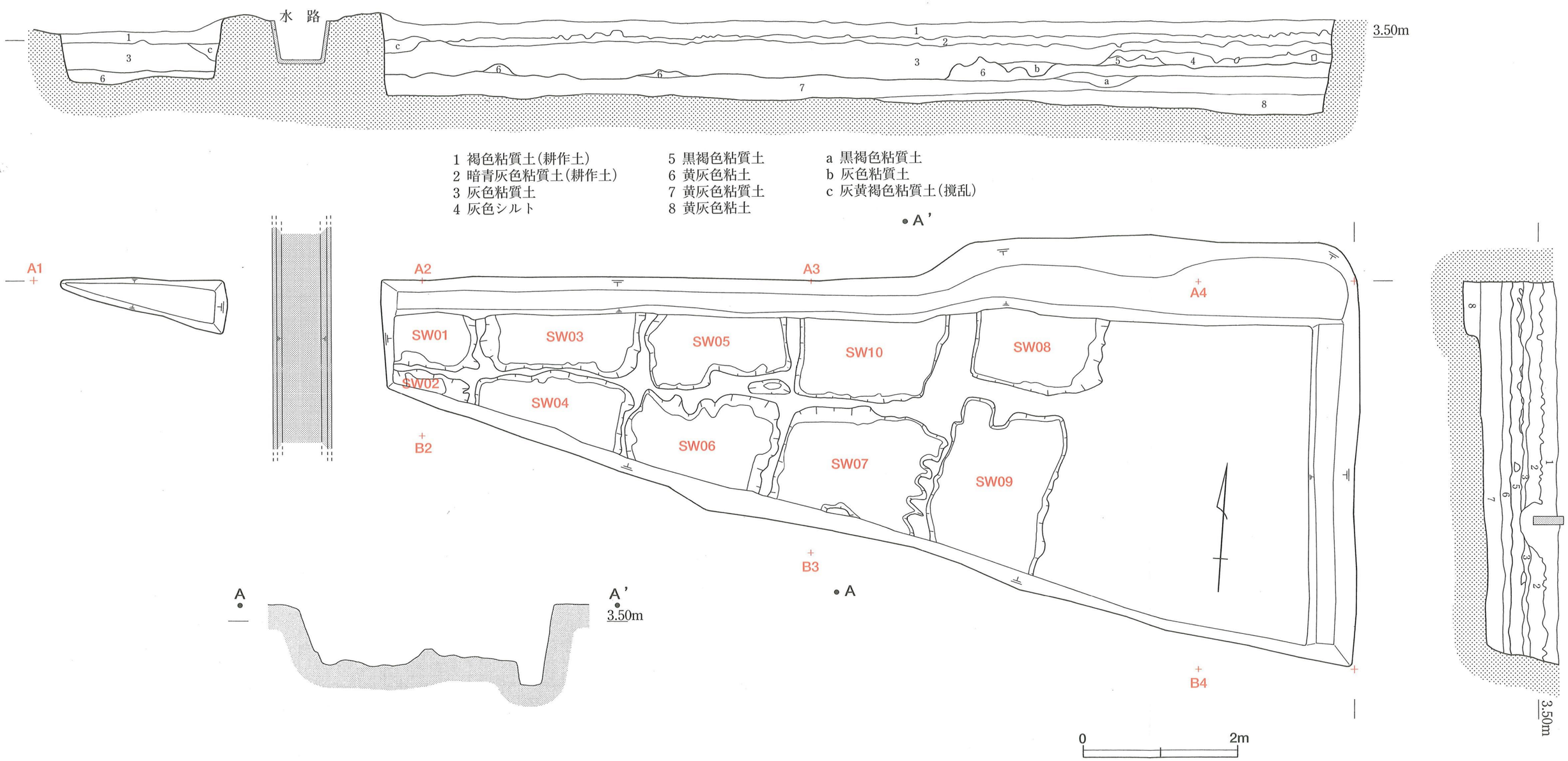
出土遺物は少なく、１区全体でビニール袋１袋分に満たない。遺物を出土する層は５黒褐色粘質土層以上で、６黄灰色粘土層以下から出土することはなかった。出土遺物は土師器・須恵器片であり、土師器片が大半を占める。いずれもごく小片であり、実測に耐えうるものは図に示す５点を数えるに過ぎない。

7－1～**7－3**は土師器、**7－4**・**7－5**は須恵器である。**7－1**は平底の坏の底部片である。底面の観察から、底部切り放しは回転糸切りによると考えられる。**7－2**は６層直上で出土した高台付坏の底部片である。底面に断面三角形を呈する高台を末広がりに貼り付け、上げ底状に仕上げている。**7－3**はＳＷ０２の覆土中から出土した高台付坏の底部片である。先細りの断面を呈する高台は、底面に末広がり気味に貼り付けられており、上げ底状を呈している。**7－4**・**7－5**は大型甕の胴下方部片と思われる。ともに内面に当て具による同心円状のオサエ痕が認められるが、外面のタタキ目は、前者が平行タタキ目であるのに対し、後者は格子状を呈している。



第７図　1区出土土師器・須恵器実測図（1：3）

６層直上から出土した**7－2**や５層中から出土した**7－3**の時期は平安時代と考えられ、その他のものも同時期頃の所産と思われる。調査範囲が狭く、また、出土遺物も少量かつ小片であるため明言はできないが、出土遺物から推測する限り、遺構の時期は平安時代と考えられる。



第6図　高岡遺跡１区遺構配置図（1：50）

２．２区の遺構と遺物

２区の土層の層序は上層から１にぶい黄褐色粘質土層（耕作土）、２オリーブ黒色粘質土層（耕作土）、2'オリーブ黒色粘質土層（耕作土）、３灰色砂層、４欠番、５黒褐色粘土層、６黒褐色粘土層（地山）、７黄灰色粘土層、８黄灰色砂層、９黄灰色粘土層である。これ以下は掘削が困難であり、土層断面の観察は行っていないが、標高1.75m付近には砂層が広がっているようである。遺構は３層掘削中に標高3.3m～3.4m付近で畝状遺構を検出した。また、部分的に６層上面で遺構検出に努めたが、遺構は検出できなかった。出土遺物は土師器・須恵器の小片がほとんどで、３層から６層直上まで出土しており、６層直上からの出土が比較的多かった。

畝状遺構（第８図）

Ａ８・Ｂ８グリッド以南で複数の畝状遺構を検出した。検出面の土が柔らかく精査には至っていないが、これらの畝状遺構の検出規模は上幅は10cm～40cm程度、長さ20cm～360cm程度と様々で、小規模なものは島状を呈している。断面は不整な台形状を呈しており、裾が広がっている。これら畝状遺構のうち、比較的長く方向が確認できるものに着目すると、概ね東北東方向と北北西方向の２方向であることが観察できる。また、島状に点在する小規模なものも、この２方向のものの延長線上にくるものが数基認められる。これらのことから、これらの畝状遺構は本来、格子状に存在していたが、後世に何らかの影響で破壊されたものと推定できる。

６層以下の調査（第９図）

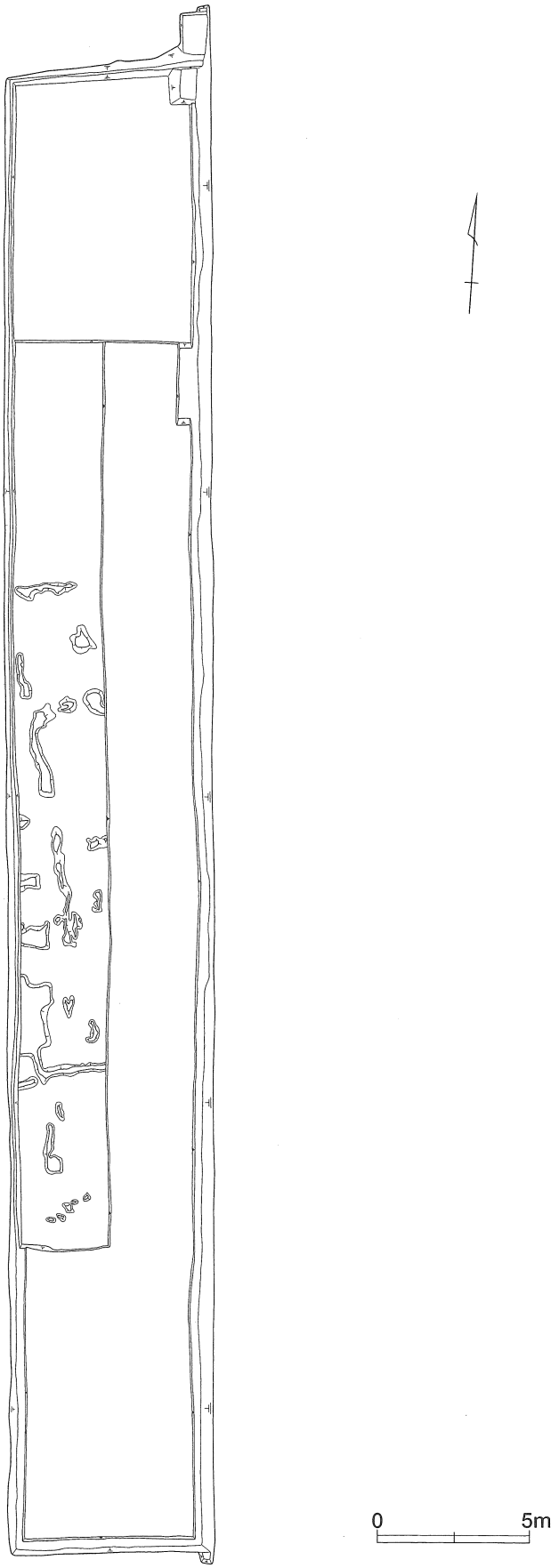
２区の６層は水田遺構を検出した１区の６層と対応すると考えられたため、上面を精査し遺構の検出に努めた。その結果、遺物は６層上面あるいは若干めり込んだ状態で出土するものの、遺構は検出できなかった。当初は調査区の範囲で全面６層上面まで掘り下げる予定であったが、途中で遺構が検出できる見込みがないと判断したため、部分的な掘削にとどまっている。なお、６層上面で精査を行ったグリッドは、Ａ３～Ａ８グリッドを除く全グリッドである。

９ライン以北においては６層の掘削を行い、６層中の遺物の有無を確認したが、遺物は検出されなかった。さらに、調査区東壁沿いに設定したサブトレンチは６層以下まで達しているがここからも遺物は出土していないため、６層以下に遺物はないと判断した。

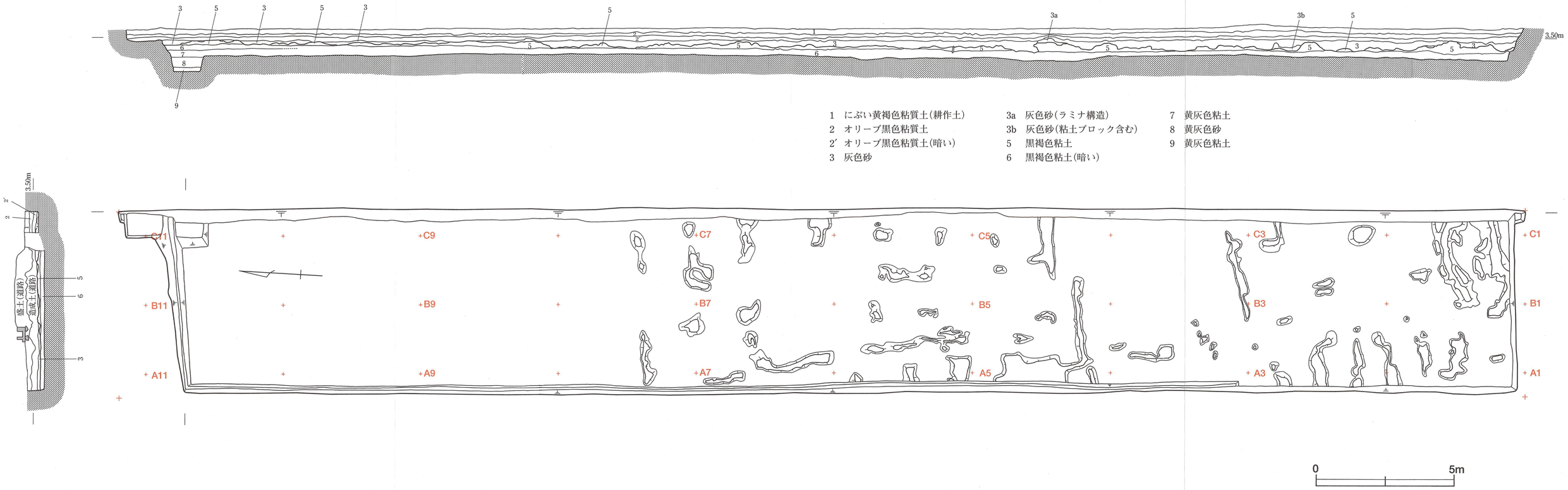
また、Ｂ10グリッドの北東角を標高2.3mまで掘削し、７層以下について遺構・遺物の有無の確認に努めたが、遺物は出土せず、遺構については観察による検出が困難であったため、サンプル土を採取し微化石分析の結果に委ねた。

標高2.3m以下は掘削が困難であったため、ピンポールを突き刺しそれ以下の堆積土の様子をつかもうと試みた結果、標高1.75cm付近で砂の感触が得られ、同時にわき水が吹き出した。この水に混ざり先の砂も流れ出たためサンプルとして採取し、鑑定したところ斐伊川の沖積作用により運搬された花崗岩の砂である[註)]ことが判明した。このことから、この辺りでは標高1.75cm付近に、出雲平野の基盤ともいえる砂層が広がっていると思われる。

註）中村唯史氏の鑑定による。



第９図　2区調査最終状況図（1：220）



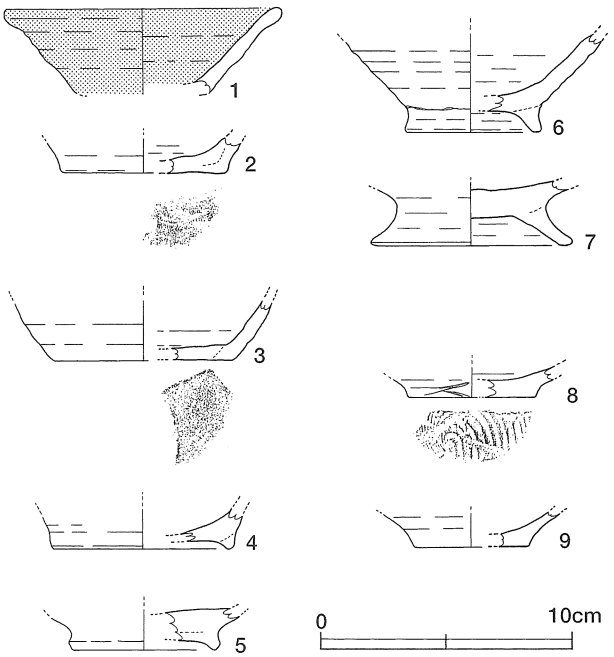
第８図　高岡遺跡２区遺構配置図（１：80）

出土遺物（第10～13図）

２区の出土遺物のほとんどは土師器片であるが、その他に須恵器、陶磁器片、鉄器、木片、炭も出土している。遺物の量は少なく全体でコンテナ１箱分に満たない。これらは主に遺構を覆う３層、遺構を形成する５層、遺構の下に堆積する６層直上からの出土であり、６層直上からの出土量が比較的多い。

土師器（第10図）

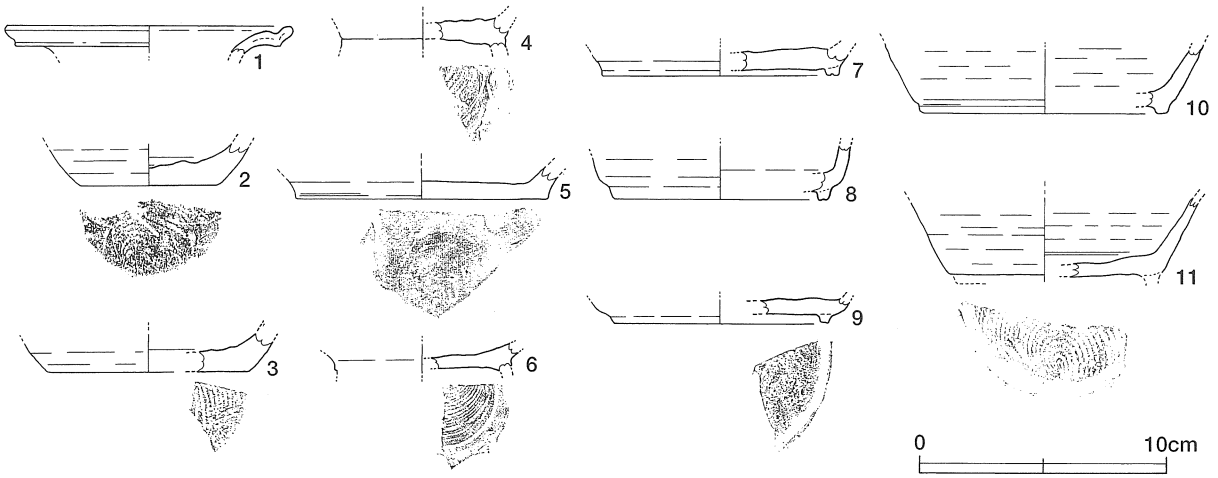
土師器は３層から６層直上までで出土し、６層直上からの出土量が最も多い。磨滅した小片がほとんどであり、実測可能なものは少なく図に示す９点を数えるに過ぎない。**10－1**～**10－7**は坏であり、**10－8**・**10－9**は皿と考えられる。**10－1**は器壁が外反気味に開口し、内外面に赤色塗彩が施されている。９世紀後半の所産と思われる。**10－2**は底面に回転糸切り痕が残る。その際はみ出した粘土が体部に付着したままの雑な調整である。**10－3**の器壁は内湾気味に立ち上がる。底部の切り放し痕は風化のため不明瞭である。**10－4**は底面外縁に高台を貼り付けている。**10－5**は厚い底面に「ハ」字状に開く高台を有する。**10－6**・**10－7**はいずれも高台を有し、器壁は直線的に広く開口する。両者とも11世紀頃の所産と思われる。**10－8**と**10－9**は底部を強くナデつけ絞っている。前者には回転糸切り痕が明瞭に残っている。



第10図　2区出土土師器実測図（1：3）

須恵器（第11図）

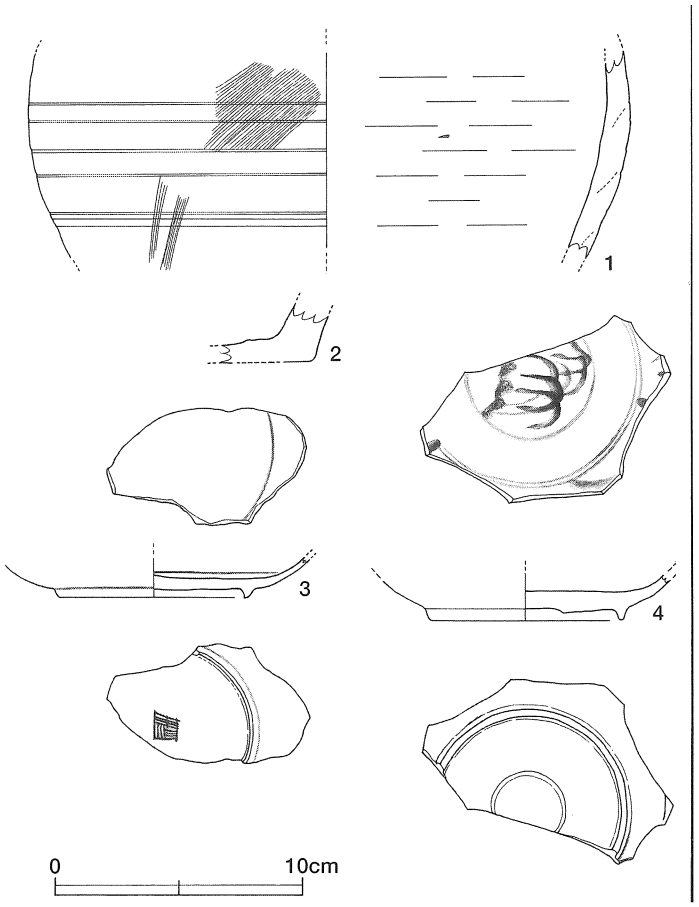
須恵器片の出土量は少なく、図化に耐えうるもの以外は甕胴部の小片など20点程度を数えるに過ぎない。**11－1**と**11－2**は壷の口縁部と底部片と思われる。後者の底面には回転糸切り後ナデ調整が施さ



第11図　2区出土須恵器実測図（1：3）

れている。**11－7～11－11**は底面外縁に低い高台が貼り付けられ、器壁の立ち上がりはやや急である。いずれも高広Ⅳ期[註]の範疇に収まるものと考えられる。

少ない資料数ではあるが、２区から出土した須恵器は奈良時代から平安時代にかけてのものが中心であり、古墳時代に遡るものは見受けられない。土師器についても同様で、今回の調査地の上限期を示すものと考えられる。



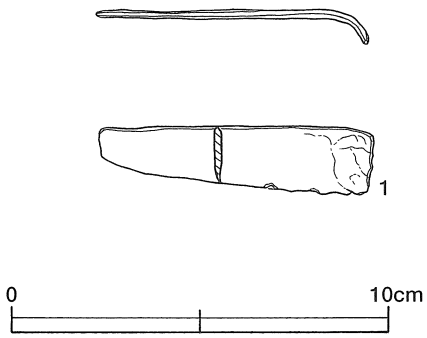
第12図　2区出土陶磁器実測図（1：3）

陶磁器（第12図）

陶磁器は５層以上で少量出土しており、図示したもの以外に小片が数点確認されている。**12－1**は備前焼の壷胴部片である。５層から出土しており、遺構の上限期を示すと思われる。**12－2**器種は不明であるが底部付近の破片である。底部に比較し器壁は薄く、外反気味に立ち上がっている。**12－3**は輸入磁器と思われる。灰白色に施釉され、内面の底部と体部の境付近及び高台の付け根外側に１条の線を染め付ける。また、底部外面には文様を画く。16世紀後半の所産と思われる。遺構を覆う３層から出土していることから、畝状遺構の下限期を示す遺物と考えられる。**12－4**は肥前系磁器と思われる。灰白色の釉薬を施しており、底部内面中央に笹状の文様を配し、同心円状に線を巡らす染め付けが観察される。18世紀の所産であろう。

鉄製品（第13図）

６層上面からは**13－1**に示す小型の直刃鎌と思われる鉄製品が１点出土している。身幅は先端に近づくに従い狭まり、使用のために先端付近で刃部がやや磨滅する。また、柄部は身をゆるく湾曲させている。



第13図　2区出土鉄製品実測図（1：2）

註）島根県教育委員会『高広遺跡発掘調査報告書―和田団地造成工事に伴う発掘調査―』1984年

３．３区の遺構と遺物

３区は２区の東10m隔てた箇所に配した調査区であるが、比較的遺構の残りがよく、調査においてより詳細なデータが得られている。

層序は上層から１灰黄褐色粘質土層、１'オリーブ黒色粘質土層（耕作土）、２オリーブ黒色粘質土層（耕作土）、２'オリーブ黒色粘質土層（耕作土）、３灰色粘質土層他、４欠番、５黒褐色粘土層、６黒褐色粘土層（地山）であり、２区と対応すると考えられる。標高3.2m～3.4mで５層により形成される遺構を検出しているが、６層以下には遺構は検出できなかった。遺物については６層直上以上で出土している。

水田遺構（第14～19図）

検出した遺構は水田遺構と考えられ、多数の小区画と大区画の一部を検出した。

小区画は1.2m×2.0m程度の不整な長方形を呈しており、N－22°－W及びN－68°－Eに伸びる小畦畔により形成されている。特徴として前者は直線的に伸びるのに対し、後者は断続的である点が指摘できる。これは両者の交点が「鍵十字」状に形成されているためである。この構造は水流が分岐し水利に有効であると同時に、畦畔が決壊しにくいという利点を持つ。したがって、田に水を張る際には、N－68°－E畦畔に沿って流れたと推定できる。

他の区と異なり、検出面が比較的締まっていたため小区画の底面では精査を行った。大小の凹凸が存在し平坦でない様子が観察できたが、足跡の検出には至っていない。

また、調査区中央の４ライン～６ライン間付近では、大畦畔１～大畦畔３による大区画も一部確認できた。大畦畔の延びる方向は小畦畔と同様N－22°－W及びN－68°－Eであり、大畦畔１～大畦畔３により形成される大区画内には、25区画以上の小区画が検出されている。大畦畔１と大畦畔２の間隔は9.8mを測り、小区画に比べ整然と区画されている様子がうかがえる。

調査時にはその存在に気づかず掘り進んでしまったが、調査区南壁セクションを観察すると、検出面より上位から畦畔が存在していたことが確認できた。検出面上位の畦畔には、幾層かの灰色砂層が堆積しており、大畦畔で顕著に観察できる。この砂層にはラミナ構造が確認できることから、洪水による堆積と考えられる。畦畔が築かれたのは洪水による砂層の堆積後であり、この砂層上位から５層に至る掘削により形成されている。したがって、畦畔断面を観察する限り、区画を掘り下げた際に生ずる掘削土を周りに盛る手法の畦畔形成を行っていない。断面形は山形あるいは台形状を呈しており、検出面での上幅は大畦畔で約80cmで小畦畔はその半分以下である。

遺構の覆土は３ｃ層と名付けた灰色砂である。この層は５層や質の異なる砂、あるいは不純物を含み、ラミナ構造も認められないことから、人工的な埋土である可能性が高い。

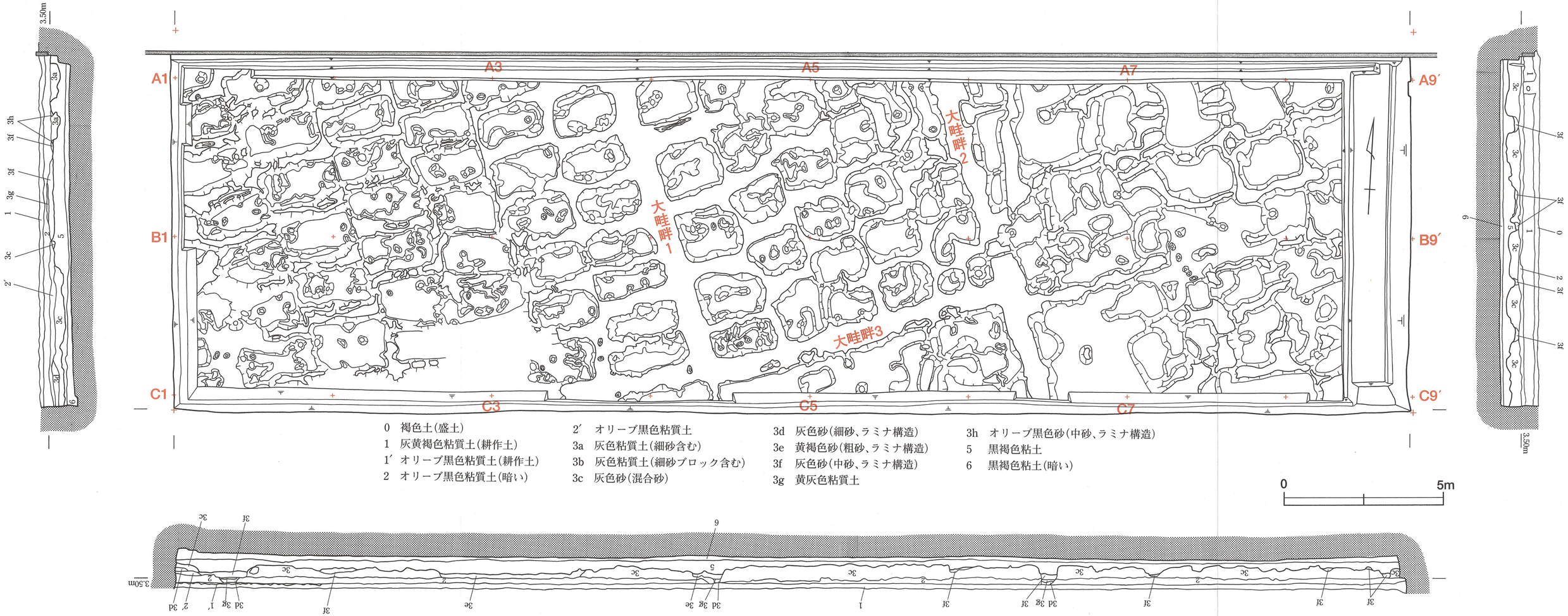
なお、調査区の範囲では畦畔を補強する板材や杭及び水路など灌漑施設は確認されていない。

６層以下の調査（第20図）

３区と２区は配置した位置が近いため、層位はほぼ対応している。２区では６層上面で遺構は確認できなかったが、３区は遺構の残りが良く検出できる可能性があったため、部分的に６層上面を精査し、遺構の有無を確認した。

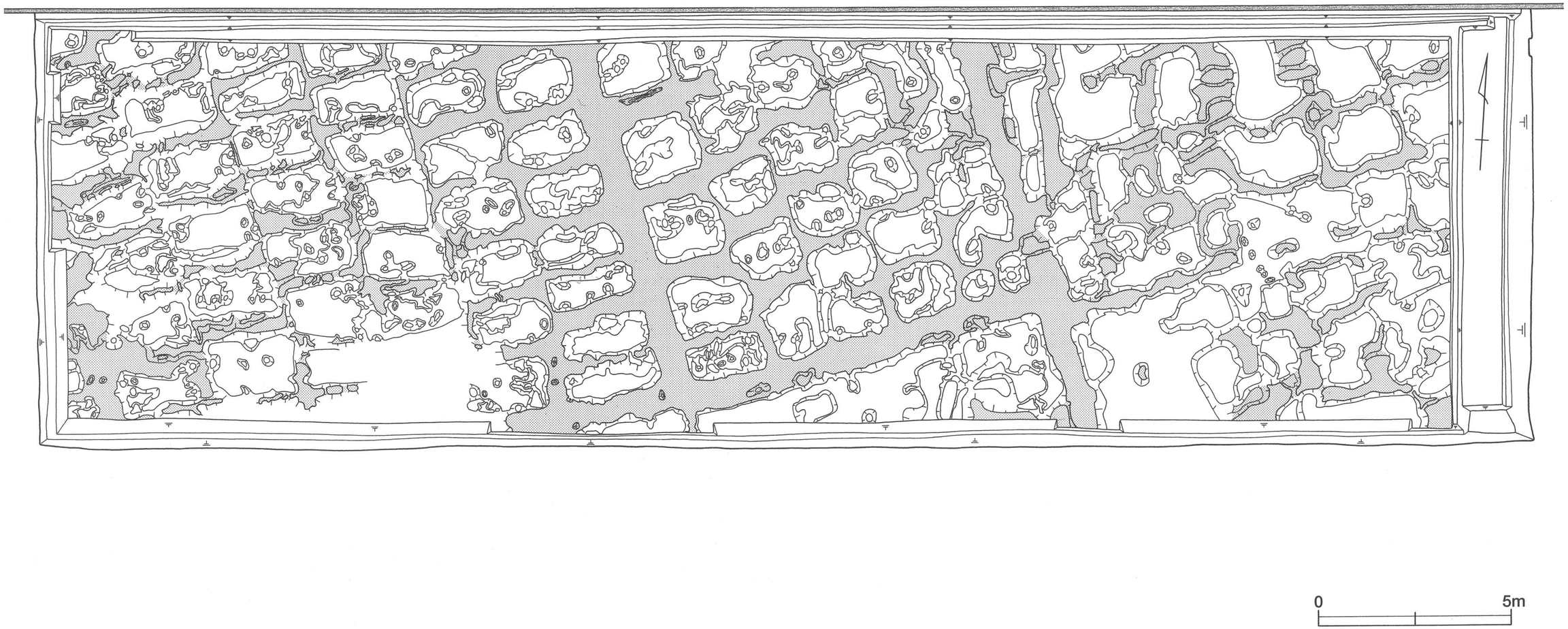
６層上面で遺構検出を行った箇所はＡ１グリッドとＢ１グリッド、調査区南壁と東壁沿いの約１ｍ

幅のサブトレンチである。結果は上面で少量の遺物が出土するものの遺構は検出できなかった。さらに下層については、調査区南東隅を深堀したが、２区と同じ層序が確認され、遺物も出土しなかったことから調査を打ち切っている。

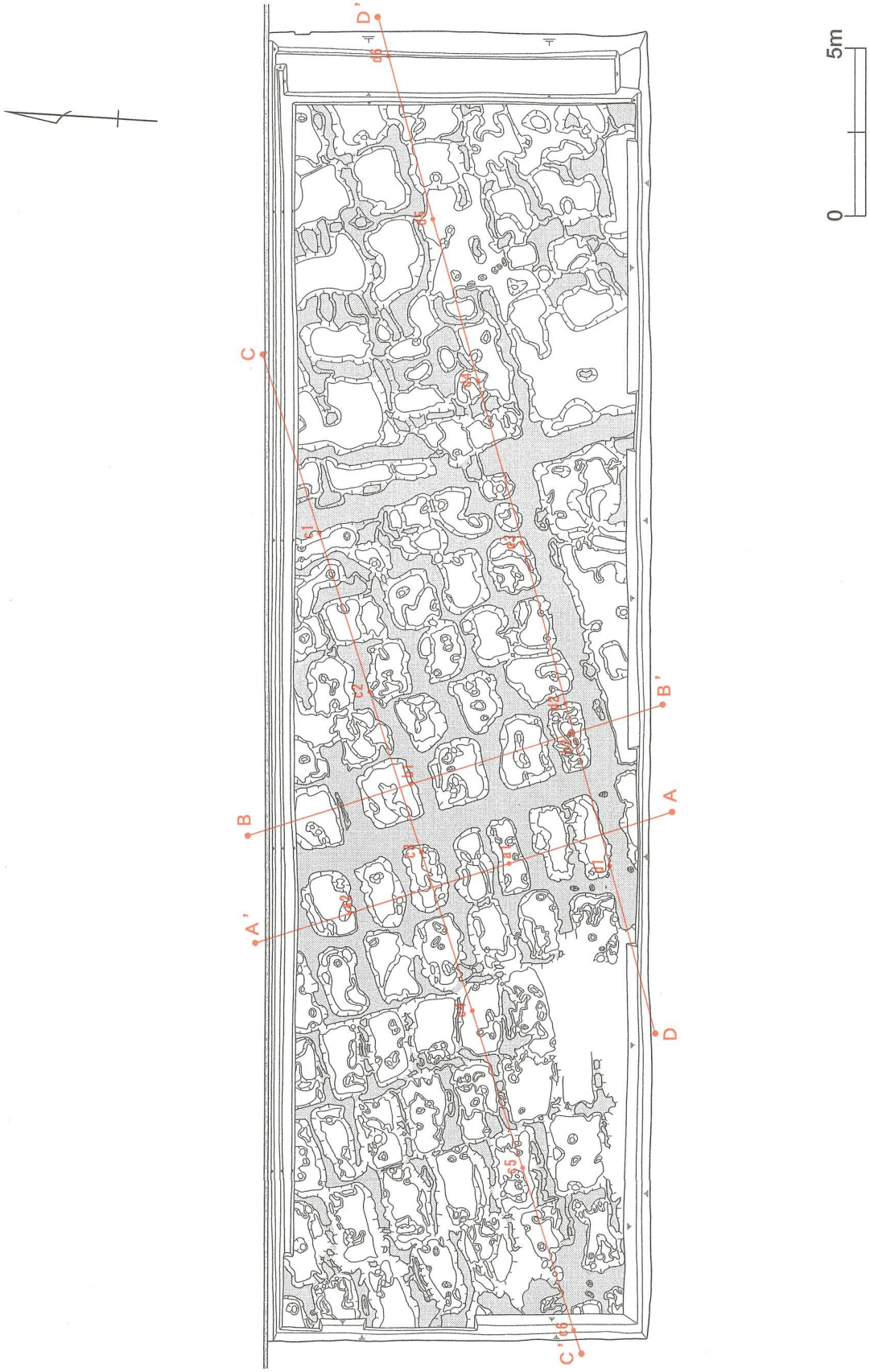


0　褐色土(盛土)
1　灰黄褐色粘質土(耕作土)
1′　オリーブ黒色粘質土(耕作土)
2　オリーブ黒色粘質土(暗い)
2′　オリーブ黒色粘質土
3a　灰色粘質土(細砂含む)
3b　灰色粘質土(細砂ブロック含む)
3c　灰色砂(混合砂)
3d　灰色砂(細砂、ラミナ構造)
3e　黄褐色砂(粗砂、ラミナ構造)
3f　灰色砂(中砂、ラミナ構造)
3g　黄灰色粘質土
3h　オリーブ黒色砂(中砂、ラミナ構造)
5　黒褐色粘土
6　黒褐色粘土(暗い)

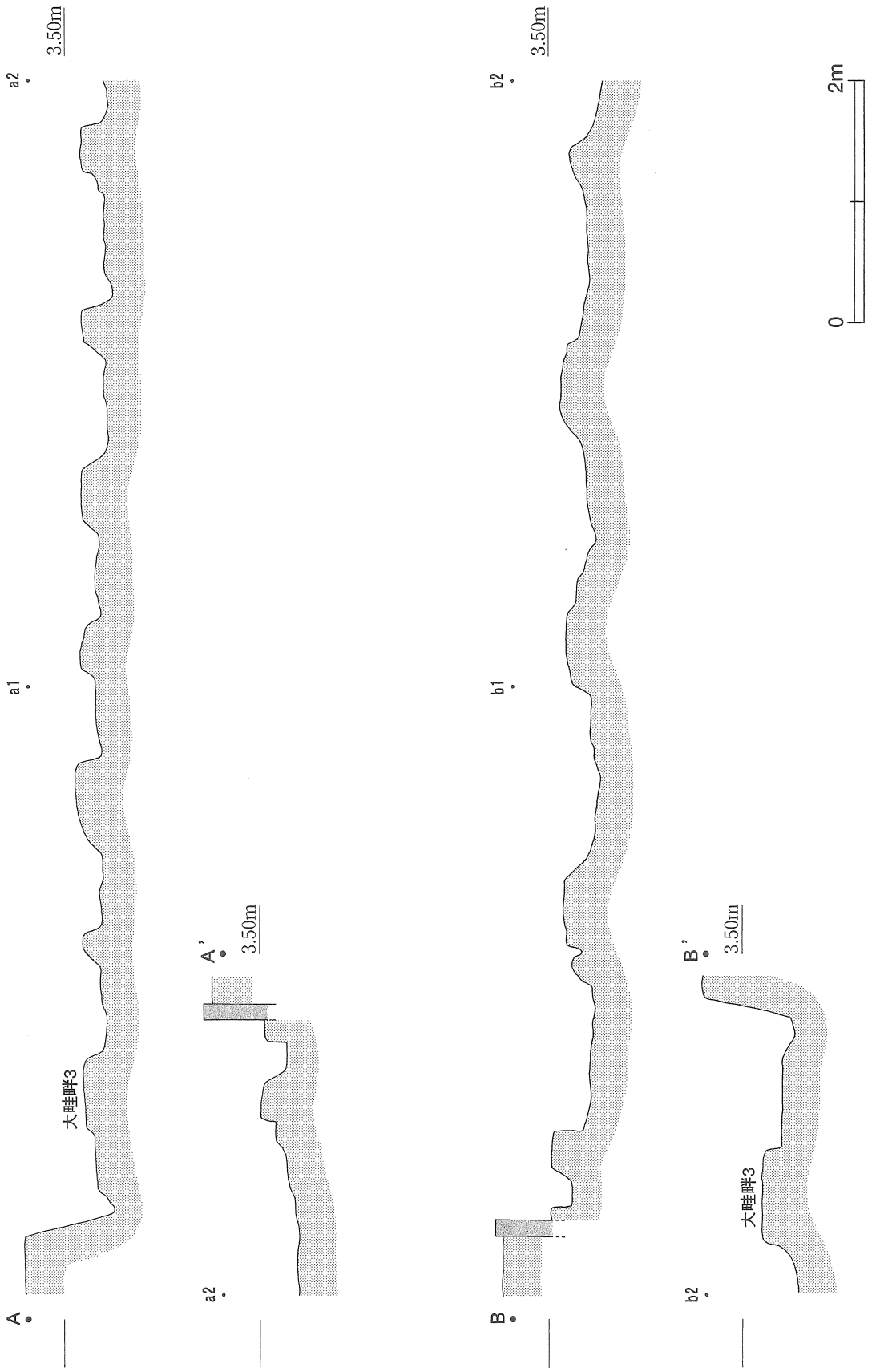
第14図　高岡遺跡３区遺構配置図（1：80）



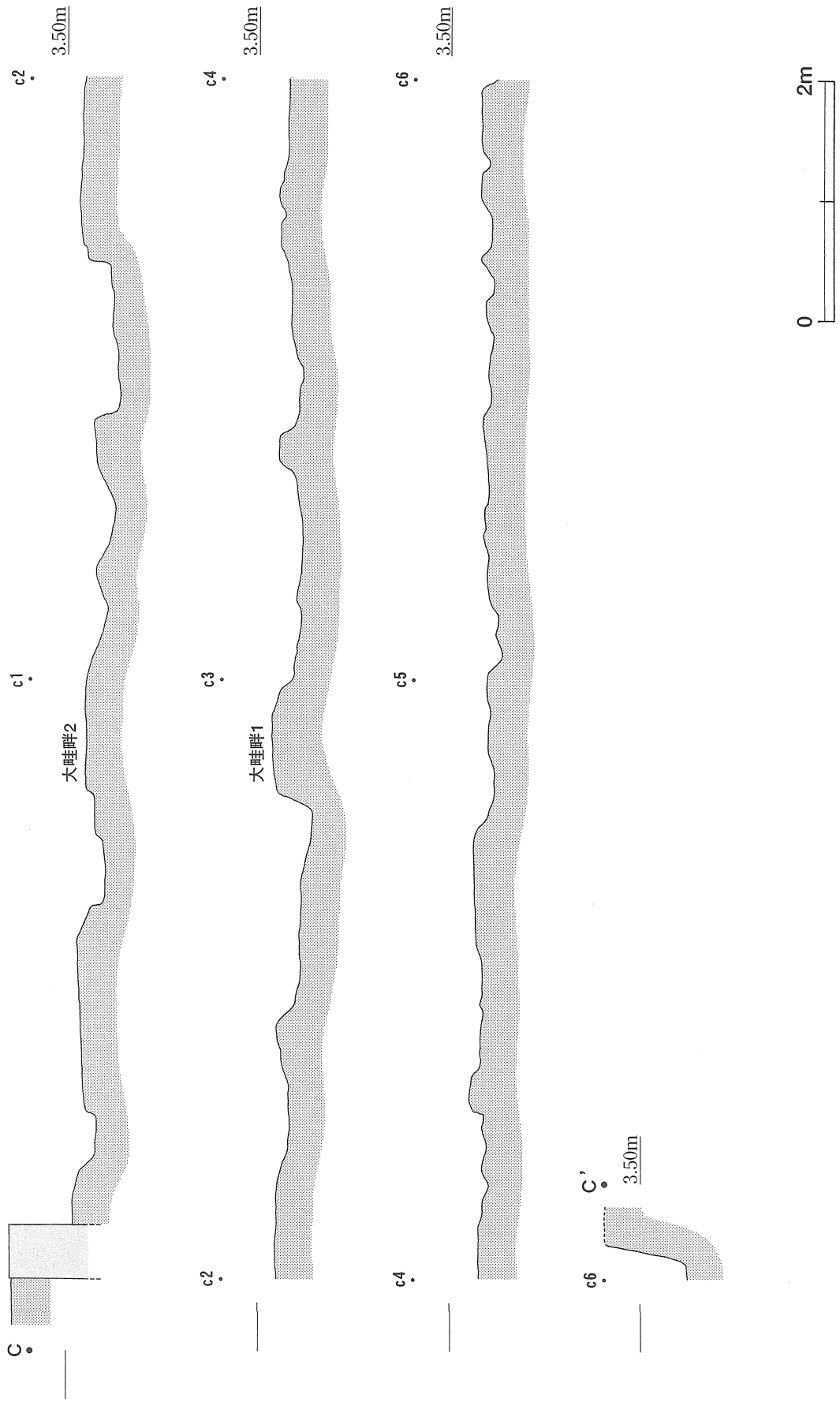
第15図　３区畦畔強調図（1：100）



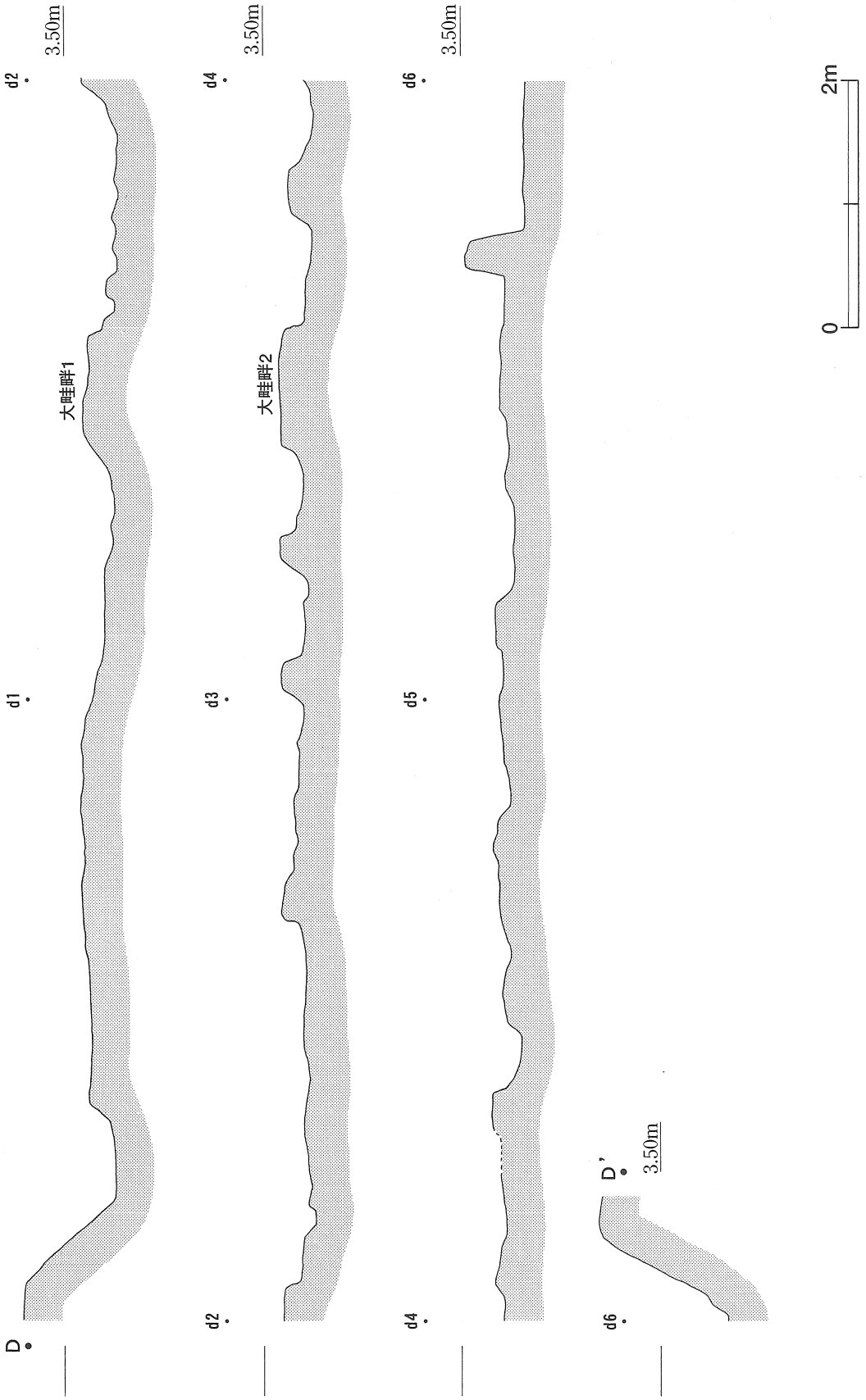
第16図　3区遺構断面ライン配置図（1：180）



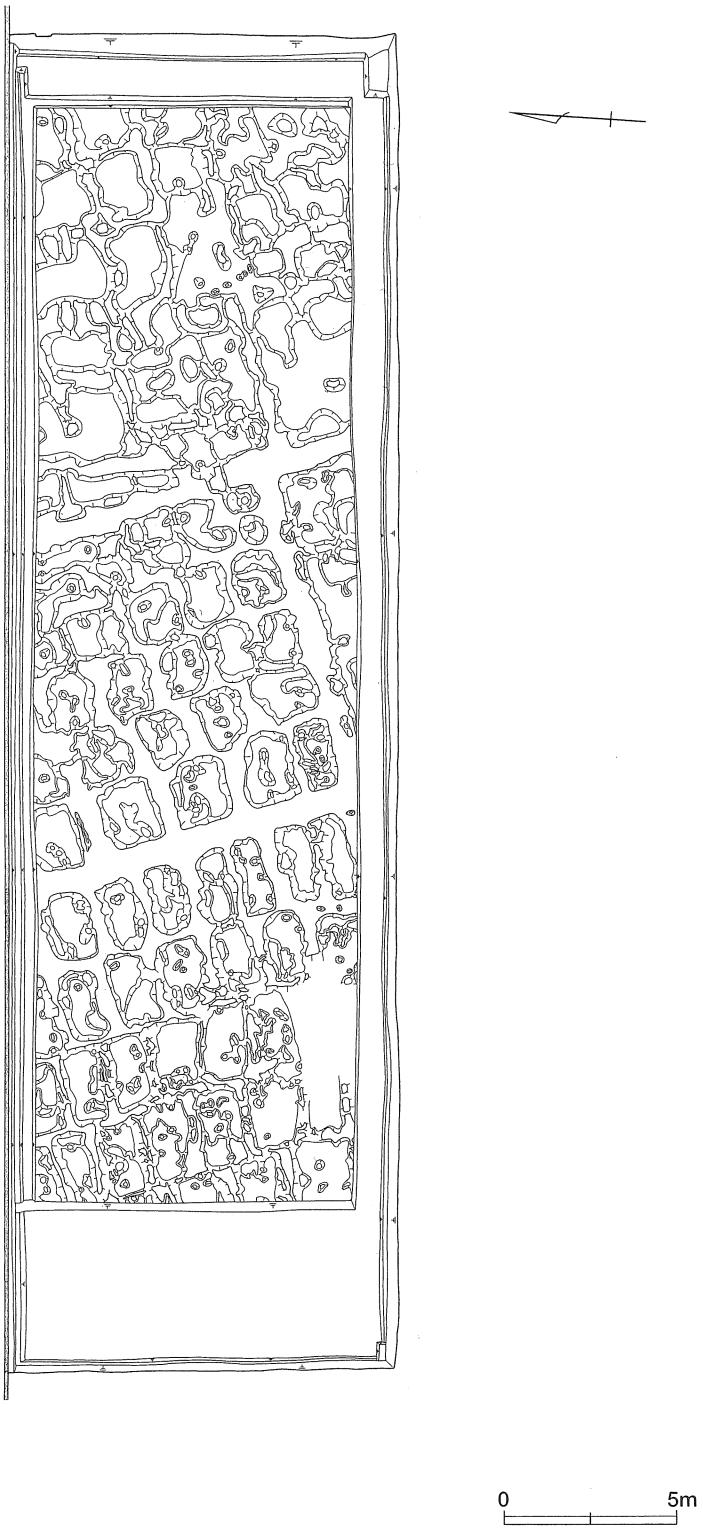
第17図　3区遺構断面図1（1：50）



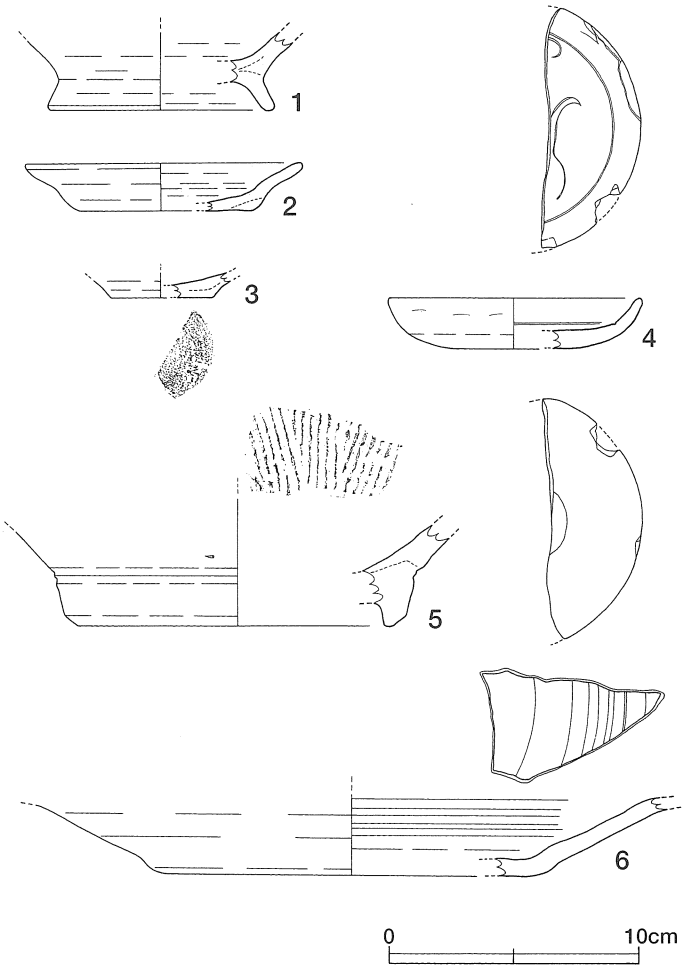
第18図　3区遺構断面図2（1：50）



第19図　3区遺構断面図3（1：50）



第20図　3区調査最終状況図（1：220）



第21図　3区出土土師器・陶磁器実測図（1：3）

出土遺物（第21・22図）

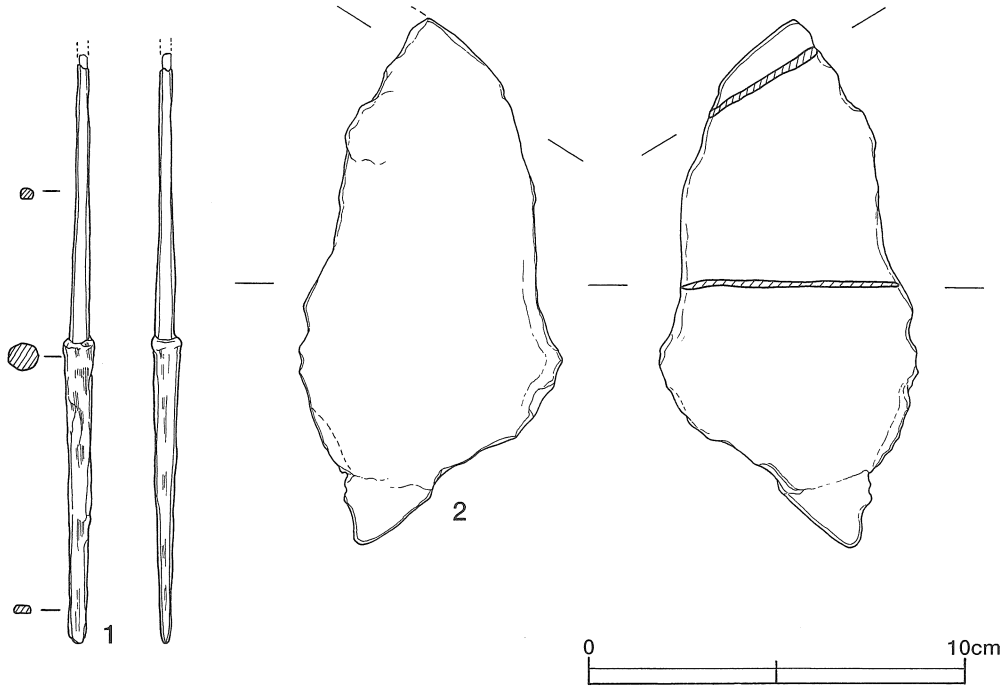
３区では土師器、須恵器、陶磁器、鉄製品、木片、炭が出土している。出土量はごく僅かで、全部でビニール袋１袋分に満たない。土師器と陶磁器の割合が大きく、その他は数点を数えるに過ぎない。なお、遺物が出土する層位は６層直上以上である。

土師器・陶磁器（第21図）

土師器で時期が推定できるものとして、**21－1**が挙げられる。底面に「ハ」字状に開く高い高台を有し、器壁も体部に向かい大きく開いている。６層直上から出土し平安時代のものである。陶磁器については、**21－4**に示す輸入品の白磁が鎌倉時代、**21－5**の陶器が江戸時代の所産である。両者とも遺構の埋土である３c層からの出土であることから、遺構の時期を推定するのに役立つ資料である。

鉄製品（第22図）

鉄製品は図示した２点だけ出土した。**22－1**は角錐と考えられる。刃部は断面四角形を呈し、着柄部は円形であるが、端部付近で幅が狭まり扁平になる。**22－2**は不整形な薄い板状の鉄製品である。外縁に部分的に刃と思われる痕跡が残るが用途は不明である。両者とも６層直上で出土している。



第22図　3区出土鉄製品実測図（1：2）

第５章　高岡遺跡における花粉およびプラント・オパール分析

渡 辺 正 巳（文化財調査コンサルタント）

はじめに

高岡遺跡は島根県中部、出雲平野の中央部に位置する。出雲平野は中国山地を源流に持つ斐伊川による沖積平野である。斐伊川は出雲平野を北流し北山山地（島根半島）にぶつかり流路を東に変え宍道湖に注ぐ。しかし近世以前には、西流し出雲市西部域に存在した「神門水海」を経て日本海に注いでいたことが判っている。

今回の調査地点は現在の斐伊川よりおよそ1.7km離れた地点であり、斐伊川西流時には、斐伊川からさらに近い地点であったと推定される。また、分析試料は斐伊川西流時の堆積物である。

また本報告は、高岡遺跡１区、２区の発掘調査に伴い出雲市教育委員会が川崎地質株式会社に委託して実施した分析調査をまとめ直したものである。

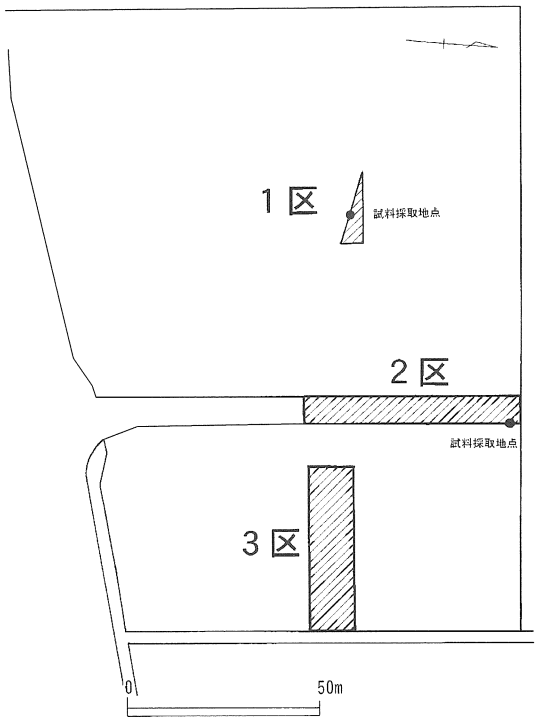


図１　調査区配置（試料採取地点）

試料について

分析試料は図１に示す２地点で、出雲市教育委員会（１区）および川崎地質株式会社（２区）により採取された。各地点の柱状図および層名、推定堆積時期を図２、３の柱状図に示す。ただし３層は、１，２区で同じ層名になっているが連続性が認められず、堆積時期が異なる可能性がある。

分析方法・結果

花粉分析処理は渡辺（1995）の方法により、プラント・オパール分析処理は藤原（1976）のグラスビーズ法により実施された。

観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて行われた。花粉分析では原則的に木本花粉総数が200個体以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・胞子化石の同定も行われた。プラント・オパール分析では、グラスビーズが400個体以上になるまで検鏡が行われた。

花粉分析結果を図２、３に示す。花粉ダイアグラムでは、検出された種類毎に、木本花粉総数を基数とした百分率で示した。さらに、検出された針葉樹花粉、広葉樹花粉、草本花粉、胞子の割合を累積百分率で示した。また、検出木本花粉総数が極めて少ない２区試料№７～12では、検出できた種類を「＊」で示した。

プラント・オパール分析結果を図４、５に示す。プラント・オパールダイアグラムでは、１ｇあたりの含有数に換算した数を検出された種類毎に示した。１区の４試料、２区試料№１、２ではタケ亜

科の細分が行われていたかった。一方２区試料№３～12ではタケ亜科の細分が行われていたことから、データの統一をはかるために２区試料№３～12ではタケ亜科合計と細分した結果の両方を示した。

花粉分帯

花粉組成の特徴、および各層の対比から、以下のように地域花粉帯を設定した。以下に各花粉帯の特徴を示す。本文中では花粉組成の変遷を明らかにするために、下位から上位に向けて記載し、試料№も下位から上位に向かって記した。

(1) Ⅱ帯（１区試料№４、２区試料№６）

マツ属（複維管束亜属）、スギ属が卓越するほか、アカガシ亜属、コナラ亜属が他の種類に比べ高率で出現する。

(2) Ⅰ帯（１区試料№３～１、２区試料№５～１）

マツ属（複維管束亜属）が卓越し、他に高率を示す種類はない。

既知の資料との比較

高岡遺跡南西方向に位置する小山遺跡では、およそ5000年前頃以降の花粉組成変遷が、断続的にではあるが得られている（渡辺・遠藤，1998）。また南部の藤ヶ森南遺跡では弥生時代以降の花粉組成変遷が得られている（渡辺，1999）。高岡遺跡の花粉組成変遷と両遺跡で得られた花粉組成変遷はよく一致する。

詳細に検討すると、高岡遺跡では出土遺物からⅡ帯が奈良時代～平安時代の植生を示していると考えられるのに対し、両遺跡で対応する地域花粉帯は出土遺物や大西（1993）との対比から奈良時代頃までの植生を示していると考えられていた。したがって、出雲平野周辺ではスギ花粉出現率の高い時期が平安時代頃までは続いていた可能性が指摘できる。やや後代になるが中世（鎌倉時代後半）には出雲守護である塩冶氏が現出雲市塩冶町に居館を築き（藤岡，1980）、周辺地域の開発を行ったと考えられている。中世における塩冶氏の街づくりのためにスギの伐採が行われたことが、Ⅰ帯とⅡ帯の間でのスギ属花粉の激減の原因の一つであると考えられる。

古植生変遷

ここでは、花粉分帯に対応する時期毎に、花粉分析結果および植物珪酸体分析より遺跡周辺の古植生を推定する。

(1) Ⅱ帯期前（奈良～平安時代以前、弥生時代以降？）

花粉化石の含有量が少なく、相対的に胞子化石が卓越する。また、微少な炭状植物片が多量に含まれるなど、上位のⅠ、Ⅱ帯と堆積状況が異なった可能性が高い。斐伊川の氾濫に伴い堆積したと考えられるが、自然堤防や河原では「火入れ」が行われた可能性もある。植物珪酸体では、タケ亜科に分類されるササ類起源のものの検出量が多く、自然堤防や河原にはササ類が茂っていた可能性がある。一方、イネ起源の植物珪酸体も僅かではあるが検出され、遺跡近辺で稲作が行われていたことが判る。また稲作が行われていたことから、本層準（９～７層）は弥生時代以降に堆積した可能性が指摘できる。さらに試料№７、９からはクスノキ科の植物珪酸体が検出される。流れ込んだものと考えられ、調査地近くあるいは斐伊川流域にクスノキ科の樹木が生育していたことが解る。

(2)　Ⅱ帯期（奈良～平安時代頃まで）

イネ科（40ミクロン以上）の出現率が高いこと、イネの植物珪酸体が多量に検出される事から、遺跡内および周辺には水田が広がっていたと考えられる。一方で草本花粉の種類も量も上位のⅠ帯期に比べて多く、イネを除くイネ科の植物珪酸体も多量に検出される。この傾向は、Ⅰ帯下部の２区３、５層でも顕著に認められる。水田内、あるいは周辺の管理がⅠ帯上部の１区１～３層、２区１～２’層が耕作土として使われていた時期に比べ劣っていたと考えられる。つまり、イネ科、オモダカ属、セリ科やキカシグサ科の雑草が水田内に、ヨモギ類やアブラナ科の雑草が畦などに生育していたと考えられる。

一方、得られた木本花粉の多くは中国山地や島根半島に由来すると考えられる。植生帯の垂直分布や現生植物の生態から考えると、シイ類、カシ類を主要素とする照葉樹林が中国山地低所および島根半島に分布していたと考えられる。一方で、人間の活動域に近い地域では二次林化が進み、アカマツ、ナラ類やシデ類を要素とする雑木林が分布していたと考えられる。また、山地縁辺部の谷筋や、扇状地の奥部にはスギ林が分布していたと考えられる。その他、モミ、ツガ、コウヤマキは中国山地高所に温帯針葉樹林を形成し、脊梁部にはブナ林が分布していたと考えられる。

(3)　Ⅰ帯期（室町時代頃以降）

前述のようにⅠ帯が塩冶氏による出雲市内の開発以降の植生を示すと考えると、Ⅰ帯期は室町時代頃以降を示すことになる。

前時期同様に、遺跡内から周辺には水田が広がっていたと考えられる。また前述のように、Ⅰ帯上部が耕作土として使われていた時期には、それ以前に比べ管理が徹底していた可能性も指摘できる。

前述のように出雲市内の開発に伴いスギが伐採されたと考えられるが、山地縁辺部にはスギ林が若干残存していたと考えられる。また中国山地縁辺部および島根半島では二次林化がいっそう進み、アカマツ林やナラ類、シデ類を要素とする雑木林が広がったと考えられる。一方で、スギ林同様照葉樹林も山地縁辺部にわずかに残存していたと考えられる。また、中国山地高所の温帯針葉樹林、脊梁部のブナ林も残っていたことは明らかである。

まとめ

花粉分析を実施した結果、以下のことが明らかになった。

(1)　花粉分析結果から、本地域の花粉化石群集をⅠ、Ⅱ帯の２花粉帯に分帯できた。

(2)　奈良時代から平安時代以降の遺跡周辺から中国山地にかけての古植生変遷を推定した。

引用文献

大西郁夫（1993）中海・宍道湖周辺地域における過去2000年間の花粉分帯と植生変化．地質学論集，39.，33－39.

藤岡大拙（1980）後塩冶氏について．出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書，185－197，建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会編.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p. 15－29.

渡辺正巳（1995）花粉分析法．考古資料分析法，84, 85. ニュー・サイエンス社

渡辺正巳・遠藤正樹（1998）出雲平野中央部小山遺跡における地質層序と古環境．LAGUNA(汽水域研究)，5.，21－223.

渡辺正巳（1999）藤ヶ森遺跡の花粉、植物珪酸体分析．藤ヶ森南遺跡－出雲郵便局移転に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－，31－37.

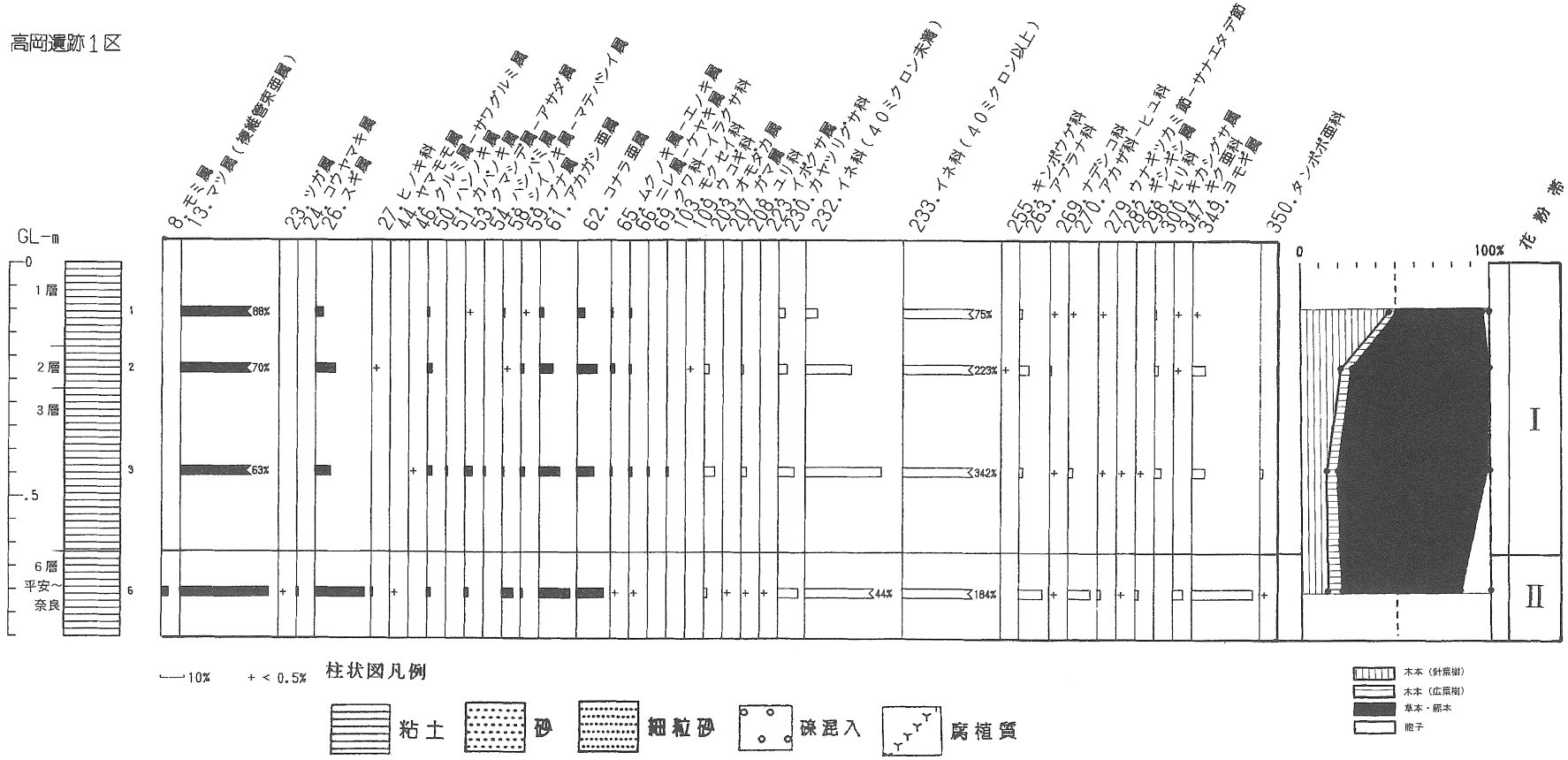


図２　1区の花粉ダイアグラム

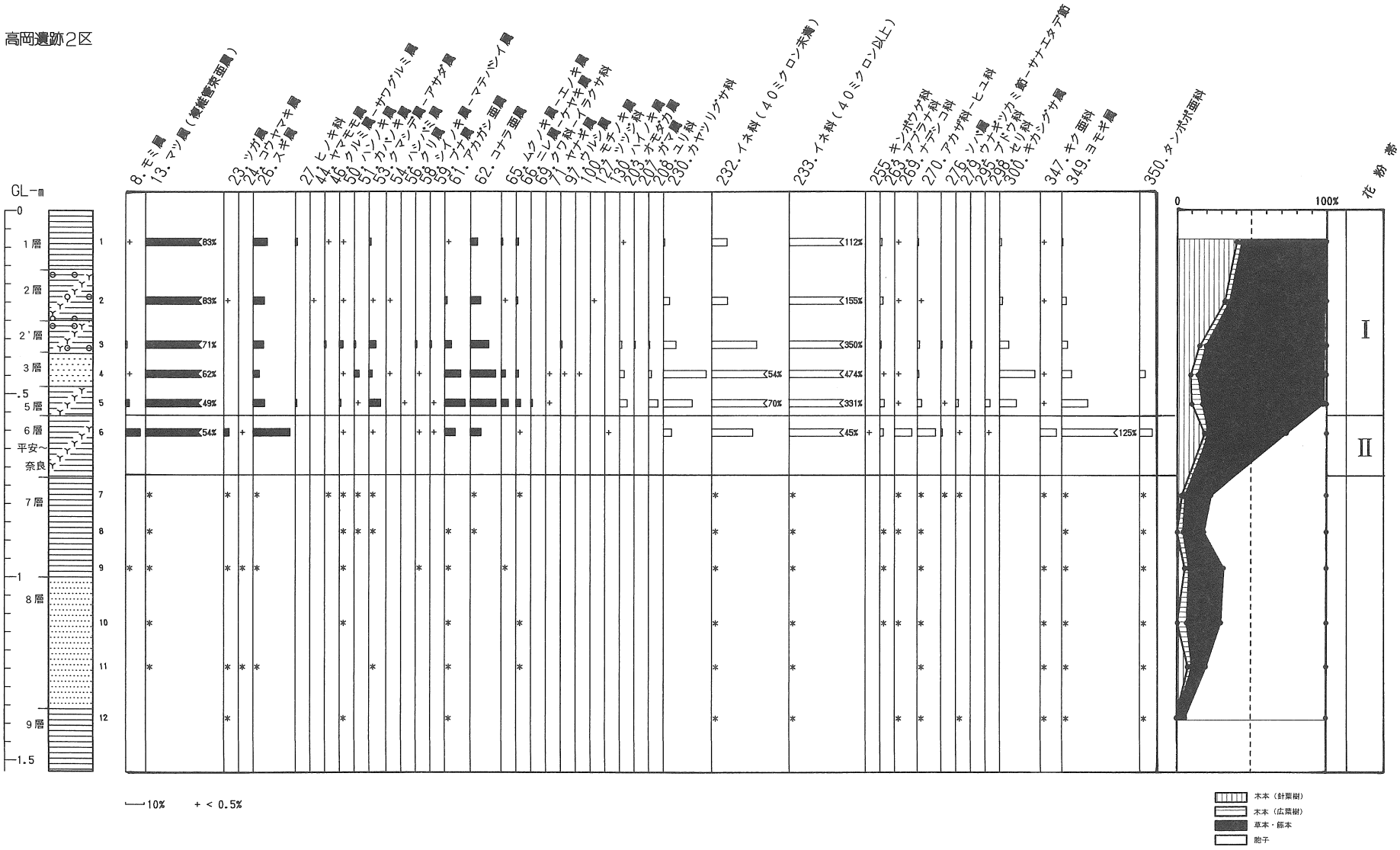


図３　2区の花粉ダイアグラム

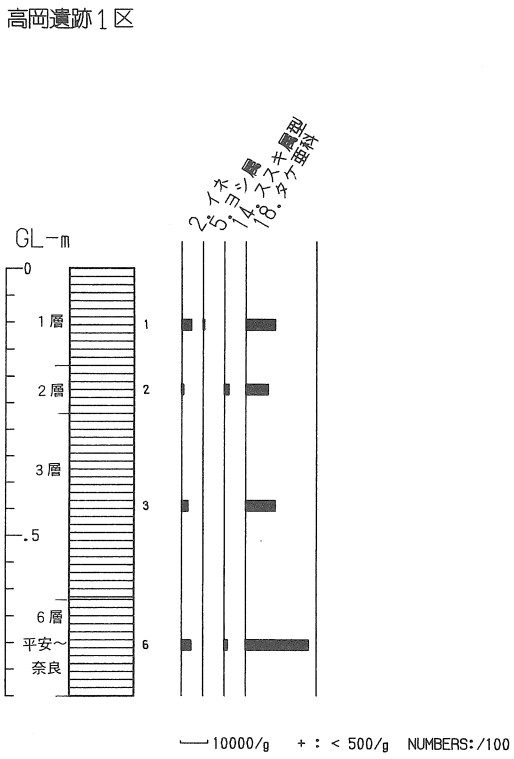


図４　1区のプラント・オパールダイアグラム

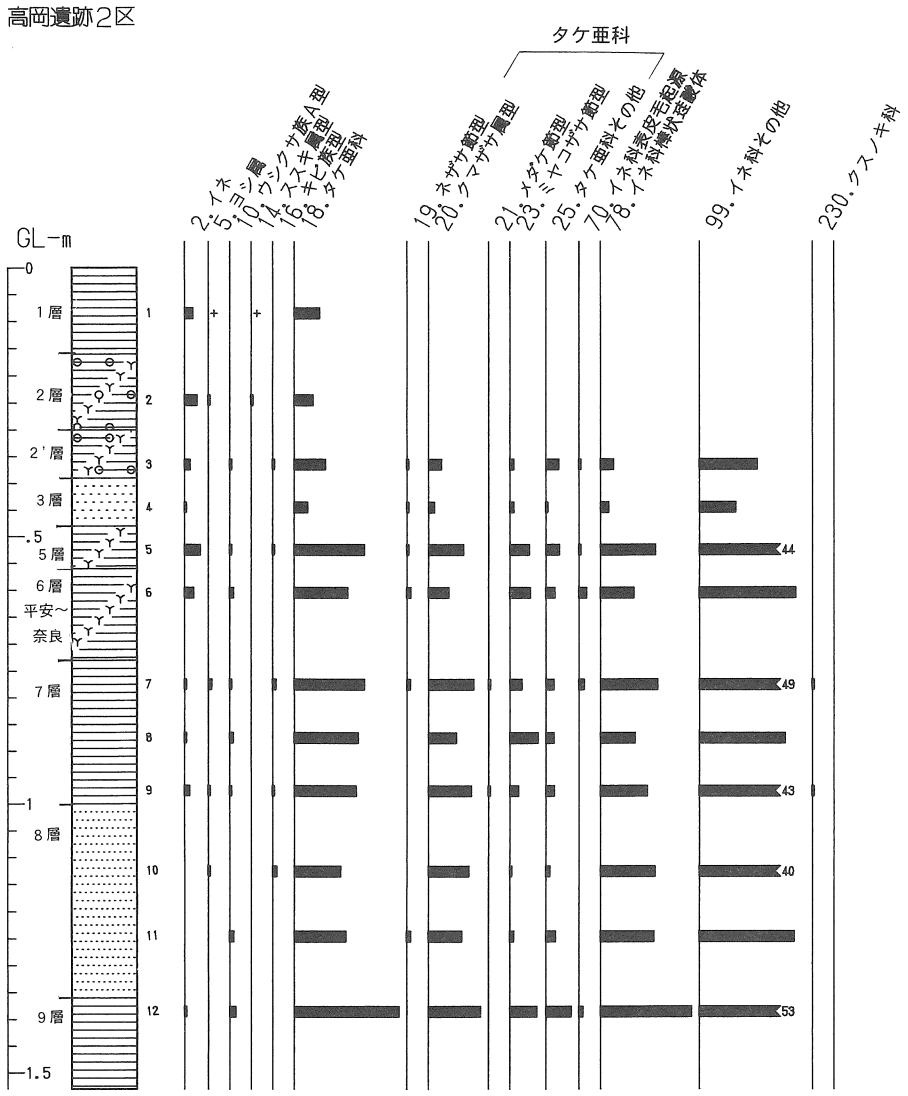


図５　2区のプラント・オパールダイアグラム

第6章　出雲市高岡遺跡から得られた珪藻遺骸群集に基づく古環境の推察

大塚泰介（島根大学汽水域研究センター）

はじめに

出雲市の高岡遺跡より得られた珪藻遺骸群集、および珪藻遺骸群集から推察される古環境について報告する。

高岡遺跡は、出雲平野北東部の微高地付近に位置する。かつて、出雲平野で西流し、日本海に注いでいた斐伊川により形成された旧自然堤防の後背湿地上の遺跡と考えられ、北には稲岡遺跡を望む。今回の調査対象となった高岡２区は、東西６ｍ×南北50ｍの長方形の調査区である。表土から70㎝掘削した標高3.2ｍ付近から、畔状遺跡が多数検出されており、水田または畑の跡であったことが推察される。

試料および方法

表土より下方に向けて、約15㎝ごとに計12本の試料を採集した。試料採集は、発掘によって生じた垂直の壁面に、直径５㎝、長さ５㎝の真鍮パイプを打ち込む方法で行われた。この試料は㈱川崎地質によって花粉分析用に採集されたものである。土器の出土状況などから、６層（試料６）が奈良～平安時代に堆積したと推定される。

約２㎤の試料を100㎖ビーカーにとり、まず１N塩酸を100㎖加えて、沸騰寸前までホットプレート上で加熱した。加熱終了後、試料を超音波洗浄器で30秒ほど処理して試料を分散させ、蒸留水を加えて12時間静値後、上清をピペットで捨てた。次に10%過酸化水素水を約60㎖加え、ホットプレート上で酸素の泡がさかんに出る程度に加熱し、約１時間保持した。加熱終了後、蒸留水を加えて６時間以上の静置沈殿後、上清を除く洗浄作業を５回繰り返した。最後に砂礫を除去して、洗浄試料を得た。

それぞれの洗浄試料を約40㎖の蒸留水中に懸濁し、そのうち50μlをプルーラックスで封入して、永久プレパラートを作成した。永久プレパラートに含まれる珪藻遺骸を、総合倍率400倍で顕微鏡観察し、殻の中心を含むものと含まないものに分けて記録した。400倍で同定不可能なものは1,000倍で同定した。溶解や破損が著しく同定不可能な遺骸については、殻の中心を含むもののみ、その数を記録した。視野幅0.5㎜での走査を１㎜おきに行うことで、永久プレパラートに含まれる珪藻のほぼ半数を計数した。ただし殻の中心を含む同定可能な珪藻が200殻を越えた場合には、その時点で計数を打ち切った。

結　果

各試料の計数結果を表に示す。

１層は、多くの珪藻殻を含んでいた。優占種は*Pinnularia subcapitata* var *elliptica* Krasske (=*P. subcapitata* var. *paucistriata* Grunow?) で、その相対頻度は20％であった。他に、*Placoneis undulata* (Østrup) Ohtsuka et Fujita，*Placoneis elginensis* (Gregory) Cox，*Sellaphora pupula* (Kützing) Mereschkowsky などの相対頻度が高かった。

２層から５層までに含まれた珪藻殻は少なく、また溶解されて厚い部分だけが残った殻の割合が多かった。同定可能な珪藻殻は、下方の試料ほど多かった。５層に含まれていた同定可能な珪藻のうち、

表　珪藻遺骸の計数結果．殻の中心が残っているもの(P)と残っていないもの(A)に分けて計数した．また，殻の中心が残っているものについては，溶解や破壊によって同定不可能なものも計数した．－は計数しなかったことを示す．

Layer	1		2		2'		3		5		6		7						8				9	
Sample	1		2		3		4		5		6		7		8		9		10		11		12	
Precence or Absence of Valve Center	P	A	P	A	P	A	P	A	P	A	P	A	P	A	P	A	P	A	P	A	P	A	P	A
Achnanthes crenulata		–									1		1		3	3	4	4	10	2	10	8	13	3
Achnanthidium lapidosa		–															1							
Amphora copulata		–																			2		1	
Biremis schwabei		–																	2					
Caloneis bacillum	5	–						1																
Caloneis silicula var. *trancatula*	2	–	1																					
Cocconeis placentula var. *lineata* *		–												1	3	7	5	6	11	21	32	40	32	36
Craticula cuspidata		–					2		4	3														
Cymbella aspera		–							2	1								2	1		1		1	3
Cymbella cuspidata		–							8	1														
Cymbella tumida	1	–							2						2		3	1	8	6	11	2	22	9
Cymbella turgidula var. turgidula																			2					
Cymbella turgidula var. *nipponica*		–																	5		5		6	
Diatoma vulgare		–															1	1						
Encyonema minutum	4	–																	3		1		4	
Eunotia praerupta		–							1															
Epithemia turgida var. *westermannii*		–															1		1	2	1		1	
Fragilaria intermedia		–																	2					
Frustulia rhomboides var. *crassinervia*	6	–																						
Gomphoneis quadripunctata		–																	2					
Gomphoneis rhombica		–																	5		7		5	
Gomphonema apuncto		–																				5		
Gomphonema auricum		–	1		1																			
Gomphonema clevei		–																	6		2		1	
Gomphonema parvulum	5	–																						
Gomphonema sp. 1 (cf. *pumilum*)		–													2		1		2		6		3	
Hantzschia amphioxys	2	–													1				3	2			4	2
Luticola mutica var. intermedia	1	–													1		4		2		7		5	
Luticola sp. 1 (cf. *mutica)*	3	–													1				1				2	
Neidium affine	4	–																						
Nitzschia amphibia		–							1															
Nitzschia frustulum	7	–																						
Nitzschia palea	5	–							1															
Pinnularia borealis		–															1		1	1	1			
Pinnularia brevissoni	6	–																						
Pinnularia interrupta	6	–							1															
Pinnularia microstauron	7	–																						
Pinnularia sp. 1	4	–																						
Pinnularia subcapitata var. *elliptica*	40	–																			1			
Pinnularia viridis	3	–						1	1										1	3		2		
Placoneis elginensis	8	–																						
Placoneis undulata	13	–																						
Reimeria sinuata	1	–													1		2		3				2	
Rhoicosphenia abbreviata	1	–																	1	2	2		6	2
Rhopalodia gibba		–						1															1	1
Sellaphora pupula	8	–																						
Surirella angusta	2	–							1															
Synedra ulna		–							1	7				3		22	4	16	5	50	3	64	10	96
Others	56	–																3	10	2	8	1	18	6
Unidentified	–	–	2	–	2	–	4	–	26	–		–	2	–	6	–	3	–	6	–	11	–	25	–

* ほかの変種をわずかに含む．

Cymbella cuspidata Kützing, *Craticula cuspidata* (Kützing) D. G. Mann, *Synedra ulna* (Nitzsch) Ehrenberg の割合が高かった。また、*Pinnularia* spp. のものと思われる溶解された殻が多く含まれていた。

6層に含まれていた珪藻はごく僅かだったが、それ以下では下方の試料ほど多くの珪藻を含む傾向が見られた。7層から9層、すなわち奈良～平安時代以前に堆積したと思われる層に共通して含まれていたのは、*Achnanthes crenulata* Grunow, *Cocconeis placentula* var. *lineata* (Ehrenberg) Van Heurck, *S. ulna*の3種であった。この3種の相対頻度は7層から9層までの全試料で高かった。*Cymbella tumida* (Brébisson) Grunow, *Luticola mutica* var. *intermedia* (Hustedt) の2種は、7層中部から9層までの各試料（試料8～12）に共通に、かつ比較的多く含まれていた。

考　察

この場所は発掘前まで水田であった。従って、地表近くの1層に含まれる珪藻は、大部分が水田に生育していたものと考えられる。1層で優占種だった*P. subcapitata* var *elliptica* と同種と思われるものが、奈良（Negoro & Higashino 1986）、大阪（Ohtsuka & Fujita 投稿中）の水田から見出されている。また、*P. undulata, P. elginensis, S. pupula* は、いずれも日本の水田にごく普通の種である（小林1950, 根来1954, 金綱1957, 1958, 1960, 1961, Negoro & Higashino 1986, 森 1999, Ohtsuka & Fujita 投稿中）。

植物珪酸体や花粉の分析結果から、この場所は5層が堆積した当時にも水田だったと考えられるが、珪藻の分析結果もこれを支持する。5層に多く含まれていた*Cr. cuspidata* は、日本の水田にごく普通である（小林1950, 根来1954, 金綱1957,1960, 1961, Negoro & Higashino 1986, 森 1999, Ohtsuka & Fujita 投稿中）。本種は河川や湖沼にも生息するが、一般に堆積物表生であり（Krammer & Lange-Bertalot 1986）、乾燥に対して耐性をもつ（Schmid 1979）ことから、水田のような環境に特に適応していると考えられる。*Cy. cuspidata* についても、水田から2例の報告があり（小林1950, 金綱 1957）、他にも止水域からの報告が多い（Kobayasi & Ando 1977, Watanabe 1990, Shiono & Jordan 1995）。

筆者らは大阪の水田において、生きた珪藻群集の細胞数および種組成が季節変動するに伴って、珪藻遺骸の殻数および種組成も良く似た変動を示すことを観察した（大塚・藤田 未発表）。この観察結果および本研究の結果から、現代の水田における珪藻殻の分解速度が大きいことが推察される。一方、森（1996,1999）の報告を見る限り、弥生および古墳時代の水田遺跡から同定可能な珪藻殻を十分に得られることは少なくないようである。以上から、珪藻遺骸の分解は、古い時代の水田の方が、近代の水田よりも進みにくかった事が推察される。この推察に従えば、2層から5層にかけて、年代の新しい上方の試料ほど同定可能な珪藻殻の数が少なかったことが説明できる。ただしその一般性および原因については、今後、十分に検討する必要がある。

7層から9層、すなわち奈良～平安時代以前に堆積したと思われる層に多く出現した5種の珪藻のうち、*C. placentula* var. *lineata, S. ulna*および*C. tumida*は、いずれも水質汚濁が著しくない河川、湖沼にごく普通の種である。このうち*C. placentula* var. *lineata*は、止水よりも河川に多く出現し（小林1995）、水生植物上に特に多い（大塚 1998）。*A. crenulata* は熱帯に多く分布する種（Hustedt 1937-1939, 津村・岩橋 1955）で、河川上流部からの報告が多い（Hustedt 1937-1939, 渡辺 1957, 辻 1995）。*L. mutica* var. *intermedia*の生息環境は明らかでないが、日本では釧路湿原からの報告があり（Togashi & Ichimura 1997）、近縁種には陸生および汽水性のものが多い(Hustedt 1961-1966, Krammer & Lange-

Bertalot 1986)。低平地において、以上の種が共存する環境条件を考える事は難しい。また、7層と9層は粘土の試料であるにもかかわらず、堆積物表生の種が少ない。したがって、7層から9層に含まれていた珪藻遺骸の大部分は、他生的、すなわちこの場所以外で生育していたと考えられる。

7層から9層より出土する珪藻遺骸の大部分は、斐伊川の氾濫によってもたらされたと私は考える。*C. placentula* var. *lineata*, *S. ulna*および*C. tumida*は、いずれも現在の斐伊川中流域に普通である（日下部 1973, 大塚 未発表)。*A. crenulata*は河口域でも発見されることがある（山川 1994）が、これは他の河川珪藻に比べて殻が厚く、遺骸が残りやすいためと考えられる。一方、*L. mutica* var. *intermedia*など数種については、湿地の堆積物表生藻あるいは気生藻として、氾濫原に生育していた可能性がある。

6層から9層までの間では、下層ほど珪藻遺骸を多く含む傾向が見られた。これは、時代が新しくなるにつれて河川との標高差が大きくなり、洪水によって珪藻殻がもたらされることが少なくなったためと考えられる。

まとめ

出雲市の高岡遺跡より得られた珪藻遺骸群集をもとに、堆積当時の環境を推察した。植物珪酸体および花粉の分析結果によれば、この場所は奈良～平安時代以降、水田であった可能性が高いが、珪藻分析の結果もこれを支持する。それ以前の層からは多くの河川珪藻が見出されており、氾濫原だった可能性が示唆された。また6層以下では、下方ほど多くの珪藻を含む傾向があったことから、古い時代ほど洪水によって珪藻殻がもたらされる頻度が高かったことが推察された。

引用文献

HUSTEDT, F. (1937-1939): Systematische und ökologische Untersuchungen über die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. Archive für Hydrobiologie, Supplement 15: 131-177, 187-295, 393-506, 638-790, 16: 1-155, 274-394.

- (1961-1966): Die Kieselalgen, 3. Teil. - In: Dr. L. Rabenhorst's Kryptogamen-Flora von Deutschland, Österreich und der Schweiz 7c: 1-816. Akad. Verlag., Leipzig.

金綱善恭（1957):京都および近郊の水田産珪藻(1). 藻類5：76－79.

-（1958):京都および近郊の水田産珪藻(2). 藻類6：23－27.

-（1960):豊橋市の海岸干拓田におけるツヅミモとケイソウについて. 陸水学雑誌21：73－76.

-（1961):豊橋市西方部にある二小島（大津島と大崎島）の水田産ケイソウとツヅミモ. 藻類9：1－8.

小林弘（1950):三重県上野市近郊水田内の硅藻および接合藻チリモ科フロラ. 陸水学雑誌 14: 195-204.

-（1995):羽状目. 環境生物図鑑（小島貞夫・須藤隆一・千原光男 編）：236－298, 講談社, 東京.

KOBAYASI, H. & K. ANDO (1977): Diatoms from irrigation ponds in Musashikyuryo-shinrin Park, Saitama Prefecture. Bulletin of Tokyo Gakugei University Series IV 29: 231-263.

KRAMMER, K. & H. LANGE-BERTALOT (1986): Bacillariophyceae 1. Teil: Naviculaceae. In: S wasserflora von Mitteleuropa (H. Ettl, J. Gerloff, H. Heynig & D. Mollenhauser eds.) 2/1: 1-876, Fischer. Stuttgart & New York.

森勇一（1996):愛知県朝日・西志賀遺跡（弥生時代）の環濠および溝中より得られた珪藻遺骸群集.

珪藻学会誌 12：69－73.
- (1999): 先史～歴史時代の地層中の珪藻遺骸群集と古環境復元への応用. 珪藻学会誌 15：127－147.
根来健一郎（1954):紀州水田産藻類. 1 . 和歌山市毛見水田の硅藻. 南紀生物 5 ： 1 － 4 .
NEGORO, K. & M. HIGASHINO (1986): Diatom vegetation of paddy fields in Japan. Report I. Diatom vegetation of paddy fields in the vicinity of Sakurai City, Nara Prefecture. Diatom 2: 1-8.
大塚泰介（1998):河川の一形態単位内における付着藻類群落，特に珪藻群落の生息場所による違い. 陸水学雑誌 59：311－328.
OHTSUKA, T. & Y. FUJITA（投稿中):Diatom flora and its seasonal changes in a paddy field in Central Japan. Nova Hedwigia.
SCHMID, A. M. (1979): Influence of environmental factors on the development of the valve in diatoms. Protoplasma 99: 99-115.
SHIONO, M. & R. W. JORDAN (1995): Recent diatoms of Lake Hibara, Fukushima Prefecture. Diatom 11: 31-63.
TOGASHI, T. & T. ICHIMURA (1997): Diatom Flora in Kushiro Mire, Hokkaido. Diatom 13: 129-145.
津村孝平・岩橋八洲民（1955):淡水産珪藻*Achnanthes creunlata*について. 藻類 3 ：57－66.
辻彰洋（1955):浦内川（沖縄県西表島）の珪藻植生. 珪藻学会誌 11：89－92.
渡辺仁治（1957):奈良県月瀬村龍王の滝の藻類相について. 陸水学雑誌 19：45－50.
WATANABE, T. (1990): Attached diatoms in Lake Mashuu and its value of the diatom assemblage index of organic water pollution (DAIpo). Diatom 5 ：21－31.
山川清二（1994）：嘉瀬川河口の珪藻. 珪藻学会誌 9 ：41－72.

第７章　まとめ

今回の調査では、出土遺物が少なく遺構の検出状況も良好ではない。したがって、各調査区単位ではデータが少なく言及できなかったことが多々あったため、調査結果全体を見渡し、かつ、微化石分析結果もふまえ、下記の項目に沿って所見を述べまとめとしたい。

遺跡の時期・性格について

今回の調査全般にわたり古墳時代以前の遺物は出土しないため、遺跡の出現期は早くても奈良時代と考えられる。また、平安時代と中・近世のものが相対的に多く出土しており、中でも平安時代のものが高い割合を占めることから、調査地付近は平安時代に中核期を迎え、中・近世に至るまで人々の生活に利用されていたことが考えられる。

検出された水田跡は、その位置関係から稲岡遺跡に付随するものと考えられる。つまり、調査地付近は、稲岡遺跡に集落を営む人々の生産の場として利用されていたものと思われる。

出土土器について

今回の調査で出土した土器片は、いずれも小片で磨滅も著しいものが多かった。この残存状態からこれらは水田域に持ち込まれたものとは考えにくい。２区の調査においては、調査区北寄りでの出土量が多く、南に向かうに従って減少する傾向にある。さらに、調査区東壁端面を観察しても、北端と南端では約20㎝の標高差が認められ、南に向かうにつれて標高が下がっている。よって、今回の調査で少量ながら出土した遺物は、稲岡遺跡からの流れ込みによるものと推定できる。

畝状遺構について

今回の調査では、１区と３区で水田遺構、２区で畝状遺構を検出している。調査区があまり離れていないにも関わらず、一見、２区は異なったものにも受け取れる。しかし、検出した畝状遺構は、その伸びる方向が３区の畦畔方向と合致することから、本来水田跡であったものが破壊され現在の形状になったと判断できる。破壊の原因としては、２区の真上に通じていた舗装が施されていない道路の影響を受けたと考えられる。

水田遺構の時期区分について

今回検出した水田遺構の時期は二期に分けられよう。つまり、１区検出のものを第一期、２区及び３区検出のものを第二期とすることができる。第一期は平安時代を中核期とし６層に掘り込まれており、第二期は中・近世に５層に築かれている。この時期設定については検出面上面で出土する土器片をもとに行っているが、１区出土の土器はごく小片であり時期が明確でないため、２区と３区の６層上面で出土する土器から推定している。６層は標高及び土質を考慮し、調査区付近一帯に堆積していると考えて良いと思われる。なお、第二期については微化石分析の結果、室町時代以降の可能性が高い。

水田の継続性について

３区の畦畔断面の観察では上部で砂のラミナ構造が確認できた。これは斐伊川の氾濫による洪水があったことを示唆するもので、調査地付近が後背低地であるという位置環境とも合致する。第一期と第二期では時間的な隔たりがあるが、水田を管理していた集団、おそらく稲岡遺跡に集落を構えてい

た人々は、幾たびか洪水の被害を受けながらも継続的に営んでいたのではないかと思われる。

稲岡遺跡の消長は調査地付近と合致することが予想されるため、水田の継続性については、稲岡遺跡の消長の検討を重ねることである程度把握できると考えられる。

遺跡出現の契機について

出雲平野に多数の集落が出現する時期は弥生時代中期であるが、調査地付近は前述のとおり、早くても奈良時代であり時期差がある。微化石分析の結果と出土した上限遺物を勘案すると、7～9層は弥生時代から古墳時代の間に堆積したと推定できるが、同層からは遺構、遺物が検出できない。これはこの時期にはまだ土地が安定せず人が住める環境でなかったためと考えられる。

斐伊川の営力によって氾濫原が形成される過程で、調査地付近が洪水の影響をたやすく受けないような比較的安定した微高地に成長するのは、出雲平野の他所より遅かったと推定され、遺跡の出現期も遅れたと考えられる。

土 器 観 察 表

挿図番号	器　種	出土地点	法量(cm)	形態・文様の特徴	手法の特徴	①胎土　②焼成　③色調(地)	備　考
7−1	土師器 坏	1区 Aラインサブトレ	底径 7.3	平底。	底部 外面：回転糸切り 内面：回転ナデ	①密 ②普通 ③にぶい黄橙色	反転復元。
7−2	土師器 坏	1区 A4Gr 6層上面	高台径 6.8	底面に「ハ」字状に開く高台を貼り付け、上げ底状に仕上げる。高台は先細りの断面を呈する。	底部 外面：ナデ 内面：回転ナデ	①0.5㎜以下の砂粒を含む ②普通 ③灰黄色	反転復元。
7−3	土師器 坏	1区 SW02	高台径 6.0	底面に「ハ」字状に開く高台を貼り付け、上げ底状に仕上げる。高台は先細りの断面を呈する。	底部 外面：不明 内面：ナデ	①砂粒をあまり含まず密 ②普通 ③にぶい橙色	反転復元。
7−4	須恵器 甕？	1区 A4Gr 5層	不　明	外面に平行タタキ目、内面に同心円状のオサエ痕有り。	胴部 外面：タタキ（叩き板） 内面：オサエ（当て具）	①1.5㎜以下の砂粒を含むが密 ②良 ③灰色	
7−5	須恵器 甕？	1区 A4Gr 6層上面	不　明	外面に格子状のタタキ目、内面に同心円状のオサエ痕有り。	胴部 外面：タタキ（叩き板） 内面：オサエ（当て具）	①まれに5㎜大の礫を含むが密 ②良 ③灰色	
10−1	土師器 坏	2区 11ﾗｲﾝｻﾌﾞﾄﾚ 6層上面	口径 10.7 底径　5.0 （推定）	器壁は底部から口縁部にかけて外反気味に開口する。体部内外面に赤色塗彩を施す。9世紀?	体部 内外面：回転ナデ	①1㎜以下の砂粒を含む ②良 ③にぶい橙色	反転復元。
10−2	土師器 坏	2区 B10Gr 5層	底径 6.4	平底。底部を強くナデつけ若干絞る。	体部 内外面：回転ナデ 底部 外面：回転糸切り 内面：ナデ	①まれに0.5㎜大の砂粒を含むが密 ②普通 ③灰黄色	反転復元。
10−3	土師器 坏	2区 B10Gr 5層	底径 7.0	平底。器壁は底部から体部に向けて若干内湾気味に立ち上がる。	体部 内外面：回転ナデ？ 底部 内外面：不明	①1㎜以下の砂粒を含む ②やや不良 ③橙色	反転復元。
10−4	土師器 坏	2区 A9Gr 5層	高台径6.9	底面外縁に雑な作りの高台を貼り付ける。	体部 内外面：ナデ 底部 外面：ナデ消し？ 内面：ナデ	①0.5㎜以下の砂粒を含む ②やや不良 ③灰黄色	反転復元。
10−5	土師器 坏	2区 A9Gr 5層	高台径5.6	底面外縁に「ハ」字状に開く高台が付く。	底部 内外面：ナデ	①砂粒をあまり含まず密 ②普通 ③浅黄色	反転復元。
10−6	土師器 坏	2区 B10Gr 6層上面	高台径5.2	器壁は底部から体部にかけて直線的に開口する。底面外縁に「ハ」字状に開く高台を貼り付ける。11世紀?	体部 内外面：回転ナデ 底部 外面：ナデ消し？ 内面：ナデ	①2㎜以下の砂粒をやや多く含む ②普通 ③にぶい黄橙色	反転復元。
10−7	土師器 坏	2区 A2Gr 6層上面	高台径7.6	底面外縁やや内寄りに「ハ」字状に開く高台を貼り付ける。11世紀?	体部 内外面：回転ナデ 底部 内外面：ナデ	①1㎜以下の砂粒を含む ②普通 ③灰白色	
10−8	土師器 皿	2区 A10Gr 5層	底径 5.0	平底。底部を強くナデつけ絞る。	体部 内外面：回転ナデ 底部 外面：回転糸切り 内面：ナデ	①まれに3㎜大の礫を含むが密 ②普通 ③灰黄色	反転復元。
10−9	土師器 皿	2区 A6Gr 5層	底径 4.5	平底。底部を強くナデつけ若干絞る。	体部 内外面：回転ナデ？ 底部 外面：ナデ消し？ 内面：不明	①まれに3㎜大の礫を含むが密 ②やや不良 ③にぶい黄色	反転復元。
11−1	須恵器 壷	2区 A9Gr 5層	口径 11.3	器壁は頸部から大きく外反した後に口縁端部付近で屈曲を変え開口する。	口縁部 内外面：回転ナデ	①0.5㎜以下の砂粒を含むが密 ②良 ③灰色	反転復元。

挿図番号	器　種	出土地点	法量(cm)	形態・文様の特徴	手法の特徴	①胎土　②焼成　③色調(地)	備　　考
11−2	須恵器 壺or坏	2区 A6Gr 3層	底径　5.6	平底。器壁は底部から体部に向けて内湾して立ち上がる。底面外縁に稜をなす。	体部 内外面：回転ナデ 底部 外面：回転糸切り後ナデ 内面：回転ナデ	①1㎜以下の砂粒を含む ②普通 ③灰白色	反転復元。
11−3	須恵器 坏	2区 A4Gr 3層	底径 36.0	平底。底面外縁に稜をなす。	体部 内外面：回転ナデ 底部 外面：回転糸切り 内面：回転ナデ	①0.5㎜以下の砂粒を含む ②普通 ③灰白色	反転復元。
11−4	須恵器 坏	2区 B5Gr 5層	不　明	底面外縁に「ハ」字状に開く貼り付け高台を有したと思われる。	底部 外面：ナデ 内面：回転ナデ 外面：ハケ 内面：ケズリ	①1㎜以下の砂粒を含む ②やや不良 ③灰色	反転復元。
11−5	須恵器 坏	2区 A7Gr 3層	底径 10.0	平底。	体部 内外面：回転ナデ 底部 外面：回転糸切り後ナデ 内面：ナデ	①緻密 ②不良 ③灰白色	反転復元。
11−6	須恵器 坏	2区 8〜10Gr 3層	不　明	底面外縁に貼り付け高台が剥離した痕跡有り。	底部 外面：回転ナデ 内面：ナデ	①緻密 ②良 ③灰色	反転復元。
11−7	須恵器 坏	2区 B10Gr 6層上面	高台径 9.4	底面外縁に高台を貼り付ける。高広Ⅳ期？	底部 外面：ナデ消し？ 内面：ナデ	①2㎜以下の砂粒をやや多く含む ②普通　③灰色	反転復元。
11−8	須恵器 坏	2区 A10Gr 6層上面	高台径 8.6	底面外縁やや内寄りに高台を貼り付ける。高台端面に凹線状の筋有り。器壁の立ち上がりは急である。高広Ⅳ期。	体部 内外面：回転ナデ 底部 外面：不明 内面：ナデ	①0.5㎜以下の砂粒を含む ②やや良 ③灰色	反転復元。
11−9	須恵器 坏	2区 A2Gr 5層	高台径 8.6	底面外縁やや内寄りに高台を貼り付ける。高広Ⅳ期。	底部 外面：回転糸切り後ナデ 内面：ナデ	①4㎜以下の砂礫をやや多く含む ②良 ③灰色	反転復元。
11−10	須恵器 坏	2区 A10Gr 6層上面	高台径 8.2 (推定)	底面外縁に高台を貼り付ける。器壁は底部から体部にかけて直線的に立ち上がる。高広ⅣB期。	体部 内外面：回転ナデ 底部 外面：回転糸切り 内面：ナデ	①1.5㎜以下の砂粒を含む ②やや良 ③灰色	反転復元。
11−11	須恵器 坏	2区 B6Gr 5層	高台径 9.8	底面外縁に高台を貼り付ける。器壁は底部から体部に向かい直線的に立ち上がる。高広ⅣB期。	体部 内外面：回転ナデ	①まれに4㎜大の礫を含む ②普通 ③灰色	反転復元。
12−1	陶　器 壺	2区 A4Gr 5層	不　明	器壁は下方でややすぼまる。	胴部 内外面：回転ナデ	①まれに5㎜大の礫を含む ②やや良 ③にぶい橙色	備前焼。 反転復元。
12−2	陶　器 壺?	2区 A5Gr 3層	不　明	平底。底部は厚く、器壁は薄い。	胴部 外面：不明 内面：回転ナデ 底部 外面：不明 内面：回転ナデ	①1.5㎜以下の砂粒を少し含む ②やや良 ③灰色	備前焼？
12−3	磁　器 皿	2区 A5Gr 3層	高台径 7.6	底面に削り出し高台を有する。内面、高台の付け根外側、底部外面に染め付け有り。	体部 内外面：施釉 底面 内外面：施釉	①緻密 ②良 ③釉：灰白色 地：灰白色	輸入品。 反転復元。
12−4	磁　器 皿	2区 表土	高台径 7.8	底面に削り出し高台を有する。内面に染め付け有り。	体部 内外面：施釉 底部 外面：一部施釉 内面：施釉	①緻密 ②良 ③釉：灰白色 地：灰白色	肥前系。 反転復元。

挿図番号	器　種	出土地点	法量(cm)	形態・文様の特徴	手法の特徴	①胎土　②焼成　③色調(地)	備　　考
21−1	土師器 坏	3区 A2Gr 6層上面	高台径 8.7	底面外縁に「ハ」字状に開く高台を貼り付ける。11世紀?	体部 内外面：回転ナデ 底部 内外面：ナデ	①2㎜以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄橙色	反転復元。
21−2	土師器 皿	3区 A1Gr 5層	口径 10.9 底径　6.7 器高　1.9	平底。器壁は体部中ほどで屈曲を変え開口する。	口縁部・体部 内外面：回転ナデ 底部 外面：不明 内面：回転ナデ	①0.5㎜以下の砂粒を含むが密 ②普通 ③にぶい黄橙色	反転復元。 内面に煤が付着する。
21−3	土師器 皿	3区 A1Gr 3c層	底径　4.0	平底。底面外縁に稜をなす。	底部 外面：回転糸切り 内面：回転ナデ	①0.5㎜以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄色	反転復元。
21−4	磁　器 皿	3区 A6Gr 3c層	口径 10.0 底径　4.0 器高　2.0	器壁は底部から口縁部にかけて湾曲し開口する。内面に文様有り。12世紀末〜13世紀。	口縁部・体部 内外面：施釉 底部 外面：釉を掻き取る 内面：施釉	①緻密 ②良 ③釉：灰白色 　地：灰白色	輸入白磁。 反転復元。
21−5	陶　器 擂鉢	3区 A5Gr 3c層	底径 12.4	底面に貼り付け高台を有する。高台の畳付の外側に面取を施す。1単位7条以上の深い条線を内面に施す。	体部・底部 外面：ナデ	①2㎜以下の砂粒を含む ②普通 ③浅黄橙色	反転復元。
21−6	陶　器 皿	3区 B5Gr 3c層	底径 14.5	器壁は底部から大きく開く。高台の付く可能性有り。18世紀。	体部・底部 外面：灰釉 内面：施釉	①緻密 ②良 ③釉：灰白色　地：灰白色	反転復元。

鉄　製　品　観　察　表

挿図番号	器　種	出土地点	遺存状態	材　質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　　考
13−1	直刃鎌	2区 A8Gr 6層上面	一部欠	鉄	7.3	0.8〜1.7	0.2	9	身巾は先端に近づくに従って狭まる。先端付近で刃部が磨滅している。柄部は身をゆるく湾曲させる。
22−1	角錐	3区 A1Gr 6層上面	ほぼ完	鉄?	15.6	0.2〜0.8	−	18	先端を欠き、断面は4角形を呈する。着柄部は断面円形を呈するが、端部付近で扁平になる。
22−2	不明	3区 A1Gr 6層上面	一部欠	鉄	13.9	6.9	0.2	56	不整形な鉄板。外縁に部分的に刃と思われる箇所有り。

写 真 図 版

高岡遺跡調査区全景（上から）

図版　2

高岡遺跡１区全景（上から）

高岡遺跡２区全景（上から）

図版　4

高岡遺跡３区全景（上から）

1　1区調査着手状況（西から）

2　1区調査風景（南東から）

図版　6

1　1区遺構検出状況（東から）

2　1区完掘状況（東から）

1　1区遺構検出状況：SW03付近（北から）

2　1区遺構完掘状況：SW03付近（北から）

図版　8

1　1区遺構検出状況：SW10付近（北から）

2　1区遺構完掘状況：SW10付近（北から）